

江戸東京博物館



主な事業

常設展

約9,000㎡の広大なスペースを活かし、綿密な調査研究をふまえて復元した実物大模型や、当時の様子を忠実に再現した縮尺模型、実物資料及び体験型資料を数多く展示。

常時約2,000点の実物資料を展示し、文化財保護の観点から、月に2回の展示替日に交換作業を行ってきた。

2015年（平成27）にリニューアルし「江戸から東京へ」コーナーを新設し、「幕末の江戸城一本丸・二丸御殿」などの新規模型を追加して、江戸東京の都市と文化、そこに暮らす人々の生活を楽しみながら学ぶことができる江戸東京博物館ならではの展示となっている。



江戸ゾーン

E1 江戸城と町割り

1590年(天正18)関東に移封された徳川家康は、江戸に本拠地を構え、太田道灌による築城以来の繁栄を継承しつつ、城下町としての整備を開始した。その後、征夷大將軍に任命されると、江戸城はさらに改修され、城下町には大名や旗本御家人とその家族・家臣などの集住が進んだ。町割りにより寺社地及び町人たちの居住域が設けられ、次第に幕府の所在地に相應しい、都市が形成されて

日本橋(模型)

復元年代:19世紀前半 縮尺:1/1

江戸に幕府が開かれた1603年(慶長8)に日本橋が架橋されたという。城下町にあり、諸街道の基点となった日本橋は、江戸の繁栄を語りかけてくる。

館内では高さ幅はそのままに、北側半分の約26mが復元され、展示のシンボルとなっている。



体験展示

江戸城松の廊下の障壁画

赤穂事件で著名となった松の廊下は、大名が將軍に拝謁する大広間から白書院に至る廊下であった。廊下には狩野派による障壁画が描かれていた。

その様子を体感できるよう、江戸城障壁画の小下絵(「江戸城本丸等障壁画絵様 本丸松の廊下」東京国立博物館所蔵)の一部を拡大して展示している。

いった。

都市の原型を語る「江戸城と町割り」コーナーは、江戸の都市づくりに焦点をあて、都市東京の出発点を探るとともに、幕藩体制の仕組みや外交関係を語っている。また天璋院や和宮の調度品ほか將軍家や大名家にかかわる調度品などを華やかに展示する。

幕末の江戸城—本丸・二丸御殿—(模型)

復元年代:江戸末期 縮尺:1/200

江戸城の中心部にあたる本丸・二丸・三丸の範囲を対象として、本丸御殿・二丸御殿を復元した模型で、復元の年代は幕末である。この当時、天守は火災により存在していなかったが、高さをイメージしてもらえよう、江戸時代前期の天守の模型を無着彩で制作した。



「武家の文化」コーナー

江戸時代の武家を語るには、具足や刀剣などの武具、さらには華やかな女乗物ほかの婚礼調度が欠かせない。「武家の文化」のコーナーでは、近年に至るまでに収集した將軍家や大名家の調度品を、展示替えしつつ観覧に供している。

E2 町の暮らし

江戸時代、庶民の多くは長屋と呼ばれる住宅に住み、そこではさまざまな職業の人たちがお互い助け合いながら、日々の生活を営んでいた。

実物大の「棟割長屋」模型をはじめ、町の運営や施設、当時の衣食住、そして江戸で起こった災害や病気など、江戸の庶民の暮らしぶりを伝える資料を展示し、江戸の庶民がどのように暮らしていたのかを紹介する。

棟割長屋（模型）

復元年代：江戸後期 縮尺：1/1

長屋は、一つの棟を数戸に仕切った住居である。そのなかでも、棟の前後で部屋を分ける形のことを「棟割長屋」と呼んだ。江戸の町の約2割に当たる狭い地域に、多くの庶民がこのような部屋を借りて住んでいた。



E3 出版と情報

江戸時代には印刷物の出版が盛んになり、それらの流通を通して、人々は事件や災害の情報を得ることができるようになった。やがて草双紙や錦絵といったさまざまな書物や刷り物が出版され、江戸独自の出版文化が華開くことになる。

このコーナーでは、書物や錦絵の制作から販売に至るまでを紹介し、多彩な出版物を展示する。

絵草紙屋（模型）

復元年代：江戸後期 縮尺：1/1

『東海道名所図会』（1797年刊行）に描かれた和泉屋市兵衛の店「甘泉堂」をもとに、江戸の絵草紙屋を復元した。黄表紙や錦絵を出版し、地図、往来物も扱っていた。当時の人気スターの相撲取りや役者の浮世絵が並べられている。



E4 江戸の商業

江戸時代は生活の変化とともに、経済活動も大きく変わっていった。大消費都市江戸には、大坂を中心とする上方からの舟運によって物資供給を行った。また三井越後屋は「店前売り」や「現銀掛値無し」など新商法をはじめた。

江戸への物資の輸送がどのように行われ、どう取り引きされていたのか、また当時の貨幣や商人について紹介する。

三井越後屋江戸本店（模型）

復元年代：19世紀初期 縮尺：1/10

江戸時代の代表的な呉服店「三井越後屋」の店前。それまでは、商人が得意先に行って商品を渡し、あとで利息を付けた対価を受け取る後払いであったが、三井越後屋は、店頭で現金販売をする代わりに利息を付けない「現銀掛値無し」という新商法をとった。



E5 江戸と結ぶ村と島

大消費都市となった江戸は、出稼ぎなど全国からの移住者が増加したことにより人口が急増し、市域も拡大した。上方から輸送される物資だけでなく、江戸近郊の農村や伊豆七島でとれた商品作物も盛んに流入していた。

このコーナーでは、それらの物流の玄関口、五街道の最初の宿となる四宿や、関東周辺の河川交通を通して、江戸と関東との結びつきがわかる資料や図版を展示する。

上水樹・木樋・継手・上水井戸

汐留遺跡出土

玉川上水は、多摩川の中流域にあたる羽村を取水口とし、武蔵野を延々43kmにわたって横切り、四谷大木戸からは網の目に張り巡らされた地下水路を通して江戸市中の人々に水を供給した。玉川上水からは多摩地域の村々の飲料水や灌漑用水として、多くの分水が引かれ、武蔵野台地の新田開発にも役立てられた。



E6 江戸の四季と盛り場

江戸の人々は、四季折々の名所に足を運び、祭礼や縁日などの年中行事に彩られた日々を送った。なかでも「盛り場」は、芝居や見世物などの興行をはじめ、娯楽に興じ飲食を楽しむ人々でひときわ賑わう場所であり、一時的に日常生活から解放される自由な空間だった。また、街道や宿場が整備されると、参詣や物見遊山に出かける庶民の

旅も流行した。こうした、江戸の人々の文化的行動について紹介する。

両国橋西詰（模型）

復元年代：江戸後期 縮尺：1/30

江戸有数の盛り場であった両国橋西詰の様子を、約1,500体の人形を配置して再現。見世物小屋、水茶屋、物売り、屋形船など、当時の賑わいを錦絵などに基づいて表現した。



E7 文化都市江戸

江戸市中では、武士や町人、地方からの文人などが集い、交流を通じて文化活動が盛んに行われるようになった。また、「鎖国」で制限された状況のもとでも実際にはオランダ、中国、朝鮮を通じて海外と結びつき、文化交流は続けられていた。このコーナーでは、江戸における文化活動の高まりや海外文化の受容について紹介する。

「海外との文化交流」コーナー

海外との交易によりもたらされた品々や学問・技術は、人々の関心を刺激し国内で受容された。またヨーロッパで需要があった陶磁器や漆器など輸出製品を展示し、海外との交流を紹介している。



E8 江戸の美

江戸は都市として成熟するにつれ、江戸好みともいべき洗練された美意識が形成され、衣類や装身具・調度などの意匠に多大な関心を寄せるようになった。ここではまず「装いとかざり」をテーマとして工芸品類を展示。つぎに「浮世絵の世界」をテーマに、浮世絵の誕生から発達、活躍した絵師たち、外国に渡った浮世絵について紹介する。

北斎の画室（模型）

復元年代：1842年（天保13）頃 縮尺：1/5

1842年（天保13）頃、葛飾北斎が娘の阿栄^{おえい}とともに住んでいた本所亀沢町榎馬場（現在の墨田区両国四丁目）の画室を再現。弟子の露木^{つゆき}為^い一^いが描いた「北斎仮宅之図」（国立国会図書館蔵）をもとに製作した。



E9 芝居と遊里

歌舞伎などの芝居見物は、江戸の人々にとって最大の娯楽であった。このコーナーでは江戸歌舞伎の特徴を解説し、舞台や芝居小屋の変遷、人々のあこがれの的であった役者たちについて展示。また、幕府公認の遊郭であり、社交場としての役割も担った吉原の成立と変遷、遊女の実像についても取り上げる。

助六の舞台（模型）

復元年代：18世紀後半 縮尺：1/1

江戸歌舞伎の代表的な演目「助六」^{すけろく}を、江戸後期の典型的な舞台上に架空の場面設定で展示している。歌舞伎の伝統は、衣装や大道具・小道具など多くが今日まで受け継がれている。この舞台では現代使用される道具類と同じものを製作し展示している。



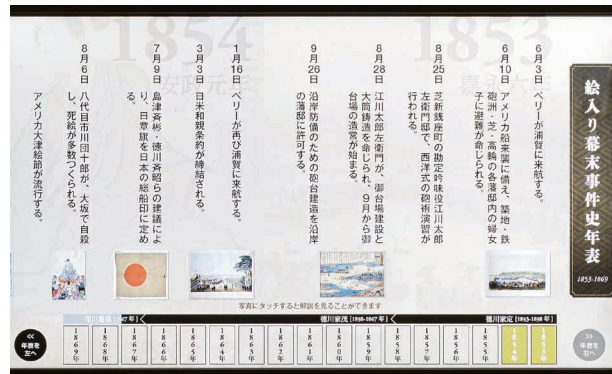
E10 江戸から東京へ

ペリー艦隊が浦賀に来航して開国を求めてから15年後の1868年（慶応4）、約260年続いた江戸幕府の政治が終わると、新しくできた政府と旧幕府の間で戦争が起こった。このとき幕臣であった勝海舟は「江戸無血開城」を主張し実現させた。

「江戸無血開城」の実現に力を尽くした勝海舟に注目しながら、江戸が東京となっていく幕末・維新の時代を紹介する。

「絵入幕末事件史年表」タッチパネル

幕末・維新の時代に起きた政治上の事件を、芸能興行や災害など、当時の社会状況がうかがえるさまざまな出来事とあわせてタッチパネルでたどることができる。当館で所蔵する錦絵や版本、瓦版など豊富な資料画像とともに解説する。



えどはく寄席



かっぱれ

2005年（平成17）9月から常設展示室5階の芝居小屋・中村座前で開催。落語や太神楽曲芸、かっぱれ、邦楽のほか、からくり人形の実演や江戸消防記念会の木遣りと梯子乗りなど、さまざまな伝統芸能の公演が季節ごとに行われてきた。

東京ゾーン

T1 文明開化東京

明治時代に入った東京では、新政府の主導で近代国家にふさわしい首都の建設が進められた。火災に強い洋風都市を目指した「銀座煉瓦街」が建設され、欧化政策のシンボルとして鹿鳴館が落成した。江戸をもとにして東京がどのようにして変化していったのか、現代へと連なる首都東京の誕生と経過を展示する。

朝野新聞社(模型)

復元年代:明治10年代(1877~86) 縮尺:1/1

明治時代、銀座煉瓦街には数多くの新聞社が集まり、銀座はジャーナリズムの中心地になっていった。銀座4丁目の交差点に社屋を構えた朝野新聞社は、社長の成島柳北と主筆の末広鉄腸らが、新政府を辛辣に批評し、人気を博した。



銀座煉瓦街(模型)

復元年代:明治10年代後半(1882~86) 縮尺:1/25

銀座煉瓦街は、1872年(明治5)2月の銀座から築地一帯を焼き尽くした大火の後、明治政府によって計画、建設された。トーマス・J・ウォートルスが設計を担当した。模型では、車道を行き交う箱馬車や、裏の路地で暮らす人々の姿も再現した。



T2 開化の背景

文明開化の一方で、庶民の衣食住は江戸の面影が色濃く残っていた。学校教育の場面においては、近代的教育がすぐに整備されたわけではなく、寺子屋から派生した私立小学校も多く存在した。庶民の暮らしを描いた版画や、近代教育制度の成立に関する資料、当時の学校で使用されていた教科書などを展示する。

体験展示

木製巫鈴(複製)

明治時代

1872年(明治5)の「学制」頒布により、わが国では初めて体育が教科と定められた。木製巫鈴は、明治時代に学校の体操用器具として普及した。この体験展示では、1886年(明治19)の「新式小学体操双六」を参考にして、木製巫鈴を使った体操を体験できる。



T3 産業革命と東京

首都東京では、明治新政府による「富国強兵」「殖産興業」政策のもと、産業が大きく伸展していった。上野で開催された「内国勸業博覧会」は民間産業の発展に大きく寄与した。明治中期から後期にかけて、重工業が急速に伸長したが、一方で騒音や劣悪な労働環境などさまざまな問題が起こった。そうした東京の産業発展の様相を紹介する。

「商工業の都市」コーナー

明治新政府による「殖産興業」政策のもと、東京は「商工業の都市」へと変化していった。このコーナーでは、王子製紙会社の製紙の工程を描いた図、内国勸業博覧会の会場を描いた錦絵などを展示し、東京の産業発展の様相を紹介している。



T4 市民文化と娯楽

文明開化以降、東京では多彩な文化や風俗が生まれた。第一次世界大戦を契機として、経済が成長すると、大量生産・大量消費による新しい生活様式が浸透した。人々の目は世界へと向けられるようになり、情報・娯楽産業の発展とともに、新聞・雑誌などのメディアが発達した。演出を施した模型や種々の資料を通して、こうした文化の大衆化を紹介する。

凌雲閣（浅草十二階）（模型）

復元年代：1890年（明治23） 縮尺：1/10

1890年（明治23）、浅草に開業した12階建ての高層展望塔。浅草のシンボルとして、関東大震災で倒壊するまで多くの人でにぎわった。

当時の写真や錦絵をもとに復元。数分おきに明かりがともり、大正時代に流行した「ジンタ」のリズムが聞こえてくる。



T5 関東大震災

1923年（大正12）9月1日に発生した関東大震災は、地震後に起きた火災の被害が甚大で、東京では7万人におよぶ人々が犠牲となった。震災後、大規模な復興事業によって街並みは一新された。

また度々洪水の被害に遭ってきた隅田川沿岸の地域では、全長24kmの荒川放水路の開削が進み、1930年（昭和5）に完成した。ここでは現在の都市東京の原型ができあがる機会ともなった災害の様子を紹介する。

「関東大震災 東京市内における火災の状況」アニメーション

関東大震災時に東京市内で発生した火災の広がりをアニメーション化した映像。1923年（大正12）9月1日午前11時58分の地震発生から、9月3日10時頃までの一連の火災の様子を時系列で追っている。1日16時頃の本所被服廠跡地（現在の墨田区横網公園一帯の地域）では、激しい火災旋風に見舞われた。



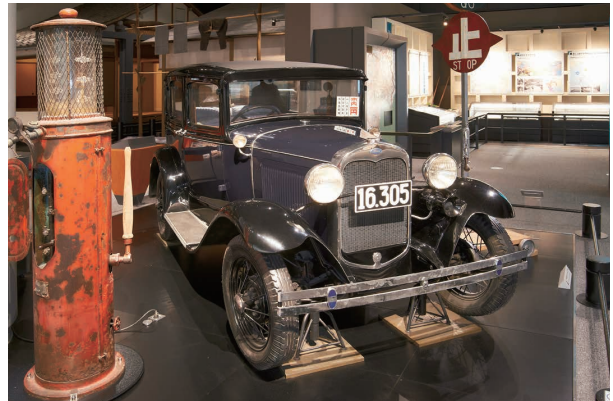
T6 モダン東京

大正から昭和前期にかけて、東京に住む人々のライフスタイルは大きく変わった。いわゆるサラリーマン層が増加し、住まいと職場が分かれていることが一般的になった。郊外へとつながる鉄道路線が次々と開通し、人々は都心から郊外へと居住地を求めた。ターミナル駅となった新宿や渋谷が新たな繁華街として発展した。そうした都市と生活の変化について、インフラや住まい、職業、余暇の過ごし方など、さまざまな側面から展示する。

円タクと同型の自動車 フォードA型・4ドアセダン

年代：1931年（昭和6） フォード自動車株式会社製

東京市内を一円均一の料金で走った「円タク」。円タク隆盛時の1927年（昭和2）の東京市は15区制で、今でいう山手線で囲まれる範囲だったが、1932年（昭和7）に35区制になり、現在の東京23区の範囲まで拡大した。市域の拡大により円タクの料金も見直された。



T7 空襲と都民

1941年（昭和16）12月、日本はアメリカやイギリスなどとの間で戦争状態に突入した。戦争が長引くにつれて日本は劣勢となり、物資の不足から市民の生活は窮乏し、やがて空襲の恐怖が迫ってきた。そのため、多くの学童が親元を離れ、地方へと疎開した。そして度重なる空襲により多くの人が罹災し、東京の大部分が焼け野原となった。

このコーナーでは戦時中の暮らしや、東京大空襲の被害を物語る資料などを展示する。

戦時下のすまい（模型）

復元年代：1944年（昭和19） 縮尺：1/1

東京下町地区によく見られた木造家屋の一室を復元し、空襲が本格化する直前の都民の生活ぶりを再現したもの。窓には爆風によるガラスの飛散を防ぐための紙が貼られ、電灯には明かりが外にもれないよう、灯火管制用のカバーがかけられていた。



T8 よみがえる東京

終戦を迎え、日本は連合国軍の占領下となり、東京には連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）が置かれた。外国人兵士が都内に在住し、専用の住宅地が造られたほか、多くの建物が接収され連合国軍用の施設となった。その一方、焼け野原となった東京では住居や物資が極端に不足し、ヤミ市などの非合法的なルートが生活を支えた。混乱の中、たくましく暮らした人々の姿を紹介する。

新宿一夜のヤミ市（模型）

復元年代：1947年（昭和22）秋 縮尺：1/10

ヤミ市は終戦直後、空襲で焼け野原となっていた駅前などに現れた非合法的なマーケットで、食品や生活用品などの当時不足していたさまざまなものが販売された。この模型は新宿にあったヤミ市を写真や聞き取り調査をもとに復元した。



T9 高度経済成長期の東京

戦後まもなく、人々は物不足と食糧難に苦しんだが、国内の製造業が復興し、昭和30年頃から高度経済成長期に入った。経済的に豊かになり、労働者の賃金も上昇、白黒テレビや電気洗濯機、電気冷蔵庫といったいわゆる「三種の神器」と呼ばれる家庭電化製品が急速に普及した。当時の暮らしぶりと、一大イベントであった東京オリンピックについて紹介する。

ひばりが丘団地（模型）

復元年代：1962年（昭和37）頃 縮尺：1/1

独立行政法人都市再生機構 東日本賃貸本部 / 部材提供

1959年（昭和34）、北多摩郡田無町、保谷町（両町は現・西東京市）、久留米町（現・東久留米市）の三町にまたがる場所に建設された集合住宅地。シリンダー錠付のドアや、室内に設けられた浴室は、プライバシーを確保し、マイホームの概念を確立させるものとなった。



T10 現代の東京

東京は世界のなかでも、最大規模の人口を有する巨大都市であり、さまざまな個性を持つ街が連続するバラエティーあふれる都市でもある。このコーナーでは、今を生きる人々の記憶にも新しい生活や文化について紹介し、現代の東京がどのように変化し、形成されてきたのかをたどる。

高度経済成長の負の側面を取り上げた「都市問題への対応」と、東京の変化を捉えた「変化を続ける東京（1960-2010）」の二つの項目で、高度経済成長期以降の東京に注目する。

「変化を続ける東京（1960-2010）」コーナー

1960年代から2000年代までの東京の変化を10年ごとに比較している。それぞれの年代に生まれ、そして消えた都市風景、注目されたモノや事象などから、時代の移り変わりを紹介している。



ミュージアム・ラボ



展示室の鑑賞ルートの最後尾に位置する「体感・体験する」コーナーである。ラボ内は1954年（昭和29）頃の暮らしを再現した住宅模型と、さまざまなプログラムを実施するためのスペースに分かれている。住宅模型では、家庭電化製品や洋風の生活が普及する前の暮らしを追体験できる。

特別展

江戸東京の歴史と文化を多彩なテーマでとらえるとともに、
都市史を中心とした専門博物館にふさわしい、
国内外の都市比較も視野に入れたさまざまな展覧会を実施している。



①

2014年NHK大河ドラマ特別展
軍師官兵衛



2014年(平成26)5月27日～7月13日

担当者 行吉正一、齋藤慎一

入場者数 75,272人

戦国時代末期、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に重用された天才の軍師、黒田官兵衛に関わる歴史資料を紹介。NHK大河ドラマと連動。

②

思い出のマーニー
×
種田陽平展



2014年(平成26)7月27日～9月15日

担当者 我妻直美、岡塚章子

入場者数 74,388人

映画「思い出のマーニー」(米林宏昌監督)で美術監督を務めた種田陽平が、アニメーション作品の世界を写真映画のセットのように表現した「マーニーの世界」を紹介。

③

東京オリンピック・パラリンピック開催
50年記念特別展
東京オリンピックと新幹線



2014年(平成26)9月30日～11月16日

担当者 行吉正一

入場者数 47,480人

新幹線の歴史を語る鉄道関係資料とともに、半世紀前の東京オリンピック・パラリンピック開催を振り返る資料を紹介。併せて高度経済成長期から現在までの東京の社会、文化、人々の暮らしの変遷をたどる。

④

探検!体験!
江戸東京



2014年(平成26)12月2日～2015年(平成27)3月8日

担当者 資料係、我妻直美

入場者数 133,715人

常設展示室の休室を機に、常設展示室の模型類やさまざまな資料を1階の展示室に集合させ、館蔵資料から江戸東京の歴史や文化を紹介。

⑤

徳川家康没後400年記念特別展
大関ヶ原展



2015年(平成27)3月28日～5月17日

担当者 齋藤慎一

入場者数 222,953人

関ヶ原合戦に参加した各大家の武具や絵画、そして合戦に際して交わされた生々しい肉声を伝える古文書などを通じてその全体像を振り返る展示。

⑥

2015年NHK大河ドラマ特別展
花燃ゆ



2015年(平成27)6月4日～7月20日

担当者 行吉正一、田原昇

入場者数 49,961人

杉文(のちの楢取美和子)や吉田松陰ゆかりの品々を一堂に集め、同時代の歴史資料と共に紹介。文とともに幕末維新期を生きた長州藩の人たちの人物像と彼らが生きた時代を振り返る。NHK大河ドラマと連動。

7

徳川の城 天守と御殿



2015年(平成27)8月4日~9月27日

担当者 齋藤慎一

入場者数 114,388人

屏風や絵地図、工芸品など貴重な資料を展示するほか、現代の最新技術によって生み出された映像や模型などを駆使し、家康たちが築き上げた「徳川の城」の魅力を紹介。

8

浮世絵から写真へ 視覚の文明開化



2015年(平成27)10月10日~12月6日

担当者 岡塚章子、我妻直美

入場者数 40,585人

浮世絵をはじめとする絵と、幕末期に渡来した写真が、幕末から明治にかけて織りなした多彩な表現を紹介し、日本文化の近代化の一面を解き明かす。

9

日伊国交樹立150周年記念特別展 レオナルド・ダ・ヴィンチ 天才の挑戦



2016年(平成28)1月16日~4月10日

担当者 齋藤慎一

入場者数 270,012人

自然観察を通じて真理に近づこうとしたレオナルド・ダ・ヴィンチの挑戦を、日本初公開の絵画《糸巻きの聖母》と直筆ノート「鳥の飛翔に関する手稿」を中心に紹介。

2016年(平成28)度

10

2016年NHK大河ドラマ特別展 真田丸



2016年(平成28)4月29日~6月19日

担当者 田原昇

入場者数 111,775人

豊臣家と徳川家による最終決戦「大坂の陣」において、大坂城東南に出丸「真田丸」を築き奮戦した勇将真田信繁(幸村)ゆかりの品や歴史資料を通じて、信繁の人間像と彼が生きた時代を紹介。NHK大河ドラマと連動。

11

大妖怪展 土偶から妖怪ウォッチまで



2016年(平成28)7月5日~8月28日

担当者 我妻直美

入場者数 217,674人

古くから日本で愛されてきた妖怪について、縄文時代の土偶から、平安・鎌倉時代の地獄絵、中世の絵巻、江戸時代の浮世絵、そして現代の「妖怪ウォッチ」まで、国宝・重要文化財を含む一級美術品で紹介。

12

よみがえれ! シーボルトの日本博物館



2016年(平成28)9月13日~11月6日

担当者 小林淳一、田原昇、窪田直子、岡塚章子

入場者数 46,100人

ミュンヘン五大陸博物館から精選した約300点の資料によりシーボルトが構想した「日本博物館」の再現を試みる。日本の文化・社会をどのように考究したのかを紹介し、19世紀における日本とヨーロッパの異文化交流について振り返る。

13

戦国時代 A Century of Dreams



2016年(平成28)11月23日～2017年(平成29)1月29日

担当者 齋藤慎一

入場者数 140,134人

戦国時代に列島の各地で生成された歴史資料や美術工芸品を一堂に展示し、多様な広がりを見せる時代を叙述しつつ、逞しく躍動した人々の姿を紹介。新たな戦国時代像に迫る。

14

江戸と北京 18世紀の都市と暮らし



2017年(平成29)2月18日～2017年4月9日

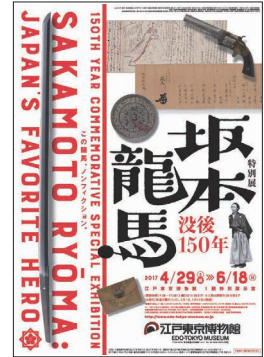
担当者 江里口友子、沓沢博行、窪田直子、胡艶紅

入場者数 43,929人

江戸が都市として発達を遂げた18世紀を中心に、江戸と北京の歴史や生活・文化を展覧し比較。日中韓博物館国際シンポジウムでの交流実績と首都博物館(中国・北京)との共同研究に基づく国際交流展覧会。

15

没後150年 坂本龍馬



2017年(平成29)4月29日～6月18日

担当者 田原昇、小酒井大悟

入場者数 116,017人

龍馬の自由奔放な生き様や家族への愛情をあらわした直筆の手紙を中心に、龍馬が暗殺された際に携えていた愛刀「吉行」などの遺品や関連資料を合わせて展示。龍馬が活躍した幕末という時代に迫る。

16

2017年NHK大河ドラマ 「おんな城主 直虎」 特別展 戦国!井伊直虎から直政へ



2017年(平成29)7月4日～8月6日

担当者 齋藤慎一、杉山哲司

入場者数 55,635人

戦国時代、男の名で家督を継いだ、「おんな城主」井伊直虎の波瀾に満ちた生涯を軸に描く。直虎に養育され、徳川家康の家臣となった直政の彦根藩井伊家創設に至る道程を、美術品・古文書などから紹介。NHK大河ドラマと連動。

17

江戸の街道をゆく 将軍と姫君の旅路



2019年(平成31)4月27日～6月16日

担当者 杉山哲司

入場者数 54,385人

将軍の上洛と日光社参、姫君たちの江戸下向に関わる資料を通して、「江戸の街道」に関する旅路をたどり、現在まで続く街道の歴史を篤姫所用の油単や、徳川家茂の上洛錦絵などで紹介。

18

江戸のスポーツと 東京オリンピック



2019年(令和元)7月6日～8月25日

担当者 沓沢博行、吉田奈緒子、小酒井大悟、杉山哲司

入場者数 49,626人

江戸時代の蹴鞠、相撲、打毬などの伝統的な競技に関する絵画や道具類、近代オリンピックで活躍した日本人選手の競技用具やメダルなど、多彩な資料を展示し、日本におけるスポーツとオリンピックの歴史をひもとく。

19

士 サムライ

天下太平を支えた人びと



2019年(令和元)9月14日～11月4日

担当者 田原昇、小酒井大悟、岡塚章子

入場者数 48,363人

世界有数の大都市であった江戸で“サムライ”がいかに活動していたのか、各家に伝来した所用品の数々から、江戸時代の人びとが見聞きし親しんでいた生の“サムライ”の生活を紹介。

20

大浮世絵展

歌麿、写楽、北斎、広重、国芳 夢の競演



2019年(令和元)11月19日～2020年(令和2)1月19日

担当者 小山周子、小酒井大悟

入場者数 129,768人

喜多川歌麿、東洲斎写楽、葛飾北斎、歌川広重、歌川国芳という人気浮世絵師に注目し、国内のほか、欧米の美術館、博物館、個人コレクションなどから、5人の絵師の得意ジャンルに絞り、優品の数々を紹介。

21

江戸ものづくり列伝

ニッポンの美は職人の技と心に宿る



2020年(令和2)2月8日～4月5日
会期変更:2020年(令和2)2月8日～2月28日

担当者 落合剛子、田中裕二、杉山哲司

入場者数 11,077人

明治前期に日本を訪れたヨーロッパ貴族バルディ伯爵の日本コレクション(ベニス東洋美術館所蔵)をはじめ、当館のコレクションを中心に、江戸東京で活躍した特色のある5人の名工たちを取り上げ、日本が世界に誇るものづくりの源泉をたどる。

2020年(令和2)度

22

奇才

江戸絵画の冒険者たち



2020年(令和2)4月25日～6月21日
会期変更:2020年(令和2)6月2日～6月21日

担当者 江里口友子、湯川説子、田原昇

入場者数 13,046人

伊藤若冲、曾我蕭白、長澤蘆雪、歌川国芳など、強烈な個性を放つ絵師や従来の江戸絵画史において“主流派”として語られてきた、俵屋宗達や尾形光琳、円山応挙など、全国から35人の奇才絵師を集め、その個性溢れる作品を選びすぐって紹介。

23

市民からのおくりもの2019

平成30年度 新収蔵品から
特別企画『青』でみる江戸東京



2020年(令和2)3月10日～5月10日
会期変更:2020年(令和2)8月4日～9月27日

担当者 資料係、小酒井大悟

入場者数 20,265人

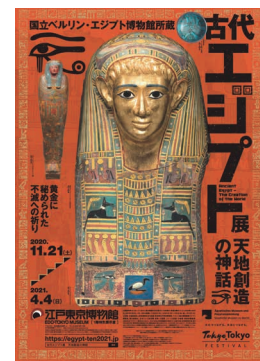
2代將軍徳川秀忠の稀少な肖像画、笠森お仙を描いた春信の錦絵、「幕末の三舟」の一人高橋泥舟の書跡資料など、2020年度に寄贈や購入した資料を公開。併せてコロナ禍の医療従事者へ感謝を示す青をテーマに館蔵資料を紹介。

24

国立ベルリン・エジプト博物館所蔵

古代エジプト展

天地創造の神話



2021年(令和3)1月2日～4月4日
会期変更:2020年(令和2)11月21日～2021年(令和3)4月4日

担当者 杉山哲司、岩崎茜

入場者数 144,267人

ベルリン国立博物館群のエジプト・コレクションから「天地創造の神話」をテーマに約130点の名品を紹介。知られざる古代エジプトの神話の世界を、アニメーションも駆使しながら貴重な出土品とともに解き明かす。

25

富嶽三十六景への挑戦
北斎と広重



2021年(令和3)4月24日~6月20日
会期変更:2021年(令和3)4月24日、6月1日~6月20日

担当者 小山周子、岩崎茜

入場者数 14,816人

「富嶽三十六景」全46点をはじめとした北斎と広重の著名な浮世絵版画や版本などを展示し、2人の浮世絵師のあくなき挑戦の数々を名品とともに紹介。

26

大江戸の華
武家の儀礼と商家の祭



2020年(令和2)7月11日~9月22日
会期変更:2021年(令和3)7月10日~9月20日

担当者 齋藤慎一、小酒井大悟、川口友子

入場者数 14,219人

都市江戸に暮らした武家や商人の儀礼、祭礼、婚姻など、「ハレ」の場面や舞台に注目し、館蔵資料の優品・初出品の資料を中心に都市江戸の活発で明るい一面に迫る。

27

縄文2021
東京に生きた縄文人



2020年(令和2)10月10日~12月6日
会期変更:2021年(令和3)10月9日~12月5日

担当者 田原昇、岩崎茜

入場者数 39,033人

東京都埋蔵文化財センターなどの特別協力により、「東京の縄文」をテーマに、縄文時代を生きた人々の“生”の暮らしを紹介。

※②①②③④⑤⑥⑦は新型コロナウイルス感染拡大防止のため会期が変更となった。詳細はp.12トピックスを参照。

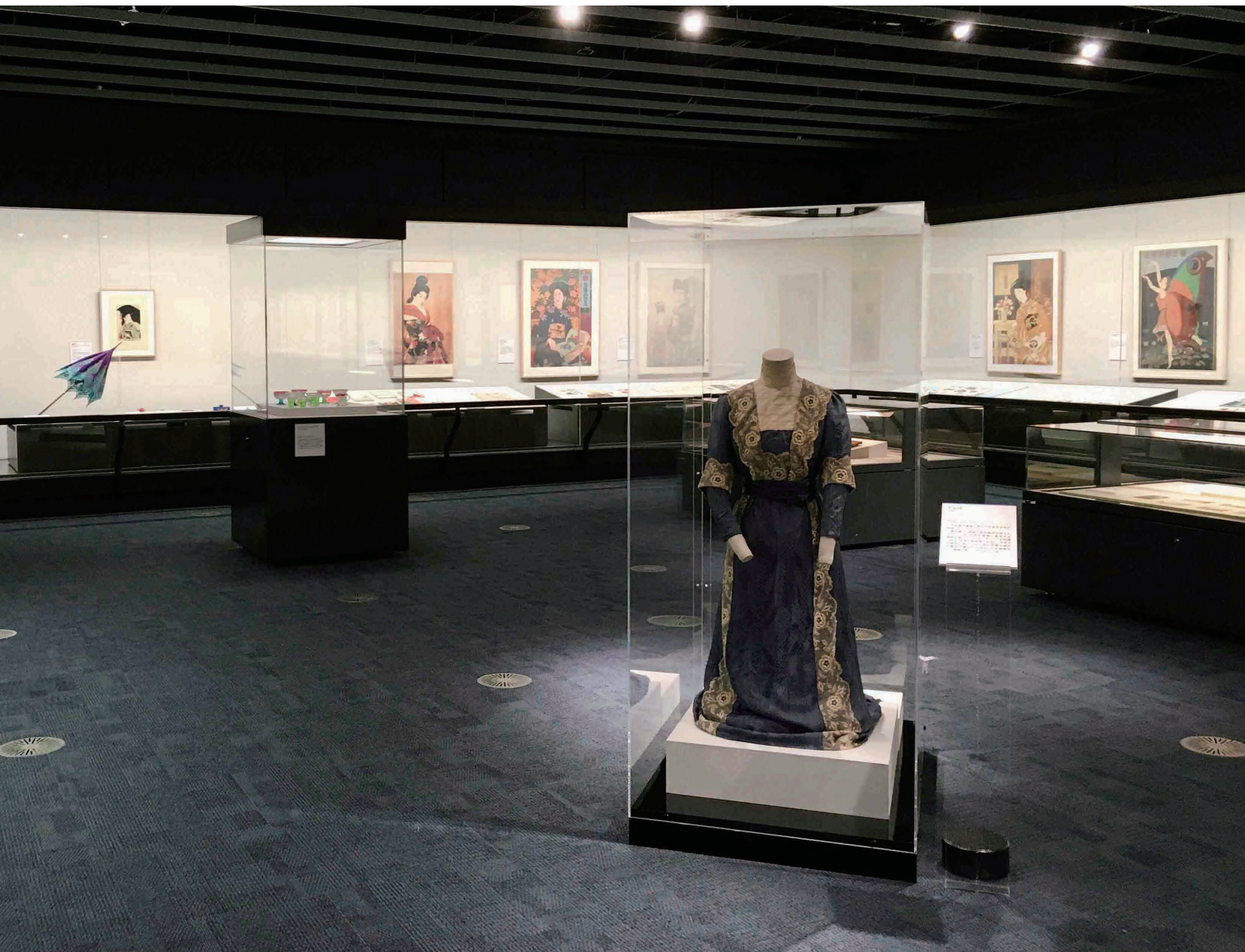


企画展

収蔵資料を中心としたさまざまなテーマの小規模展覧会を常設展示室で開催することにより、常設展に対する注目を高め、新たな観客誘致を図っている。

2004年（平成16）度から、合計102本の企画展を開催。

本書では2014年（平成26）度～2021年（令和3）度で開催した企画展を掲載した。



①

徳川将軍の書画



2014年(平成26)4月26日～6月8日

担当者 田原昇

徳川記念財団が所蔵する歴代将軍の書画を展示し、各将軍の人となりやその治世を紹介。将軍から大名や旗本に下賜された自筆画のゆくえを追い、武家社会における将軍自筆画の役割にも迫った。

②

発掘された日本列島展 20周年記念
発掘された日本列島 2014



2014年(平成26)7月26日～9月15日

担当者 阿部由紀洋、眞下祥幸

かざはり 風張1遺跡出土の土偶(国宝) どうぐんまゑ 道訓前遺跡出土の土器といった重要文化財と、著名な遺跡の発掘調査の成果を紹介。地域展「新宿に生きた縄文人―市谷賀町二丁目遺跡の発掘―」も実施。

③

モダン都市 銀座の記憶
写真家・師岡宏次の写した50年



2014年(平成26)10月7日～11月30日

担当者 沓沢博行

2014年(平成26)に生誕100年を迎えた写真家・師岡宏次が、1930年(昭和5)から50年余りにわたり撮り続けた銀座の写真を紹介。銀座の歩んできた歴史と、そこに集った人々の姿をふり返る。

④

リニューアル記念企画展 特別公開
広重「名所江戸百景」展



2015年(平成27)3月28日～5月10日

担当者 江里口友子

歌川広重の代表作として位置づけられる名所絵のシリーズ「名所江戸百景」全120枚(2代広重作画、目録を含む)を前期と後期に分けて展示。

⑤

発掘された日本列島 2015
新発見考古速報



2015年(平成27)5月30日～7月20日

担当者 小酒井大悟、眞下祥幸

旧石器時代から近代の19遺跡の出土品を展示。東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査の成果も紹介。地域展は、東京の玄関口であった新橋駐車場の姿に迫る「汐留遺跡 新橋停車場」を実施。

⑥

くらべてみよう江戸時代



2015年(平成27)8月11日～9月27日

担当者 眞下祥幸、長屋さくら

江戸時代に流行した書物や絵画をはじめ、江戸市中で発行された「瓦版」や「見立番付」などから、江戸っ子たちがどのような情報を持ち、何に興味を持っていたのかを紹介。

7

市民からのおくりもの2015 平成25・26年度 新収蔵品から



2015年(平成27)10月20日～12月6日

担当 資料係

近年新たに収蔵した資料を公開する展覧会。2013年(平成25)度は約1,800点、2014年(平成26)度は約6,500点の資料を収蔵し、その中から一部を厳選して展示。

8

歴史をつなぐ 天璋院の用筆筒 篤姫から受け継がれたもの



2016年(平成28)1月2日～2月21日

担当者 小酒井大悟、眞下祥幸

徳川記念財団が所蔵する徳川家ゆかりの品々を紹介する展覧会。13代将軍継室となった天璋院所用の「梨子地宮牡丹蝶尾長鳥文蒔絵用筆筒」に収められていた品々を展示。

9

近代百貨店の誕生 三越呉服店



2016年(平成28)3月19日～5月15日

担当者 田中裕二

日本における近代百貨店の成立を、三越呉服店を題材に、当館が所蔵する錦絵、絵葉書、写真、ポスターなどでたどった展覧会。

2016年(平成28)度

10

発掘された日本列島2016 新発見考古速報



2016年(平成28)6月4日～7月24日

担当者 小酒井大悟、杉山哲司

旧石器時代から近代までの全国の遺跡から、六反田南遺跡より出土した縄文土器をはじめとする出土品を展示。地域展「掘り出された江戸の町 一橋高校遺跡出土資料から」も実施。

11

山岡鉄舟生誕180年記念 山岡鉄舟と江戸無血開城



2016年(平成28)8月11日～9月25日

担当者 小酒井大悟

江戸無血開城に大きな役割を果たした山岡鉄舟。鉄舟ゆかりの寺院である全生庵の協力を得て、その生涯に注目しながら、幕末・維新史のハイライトである江戸無血開城を振り返った。

12

伊藤晴雨 幽霊画展



2016年(平成28)8月11日～9月25日

担当者 小林愛恵

全生庵所蔵の晴雨筆幽霊画(5代目柳家小さんコレクション)を中心に、緻密な時代考証研究による江戸風俗画なども展示。特設コーナー「幽霊が美しいースタジオジブリ鈴木敏夫の眼ー」も設けた。

13

市民からのおくりもの2016

平成27年度 新収蔵品から



2016年(平成28)10月15日～12月4日

担当 資料係

近年新たに収蔵した資料を公開する展覧会。2015年(平成27)度に収蔵した5,500点余りの資料から厳選し、東京空襲の焼け跡を描いたスケッチ159枚や寄席関係資料などを展示。

14

徳川將軍家の婚礼



2017年(平成29)1月2日～2月19日

担当者 小酒井大悟、杉山哲司

徳川記念財団が所蔵する婚礼行列の様子を描いた絵巻や、13代將軍継室篤姫(天璋院)、14代將軍正室和宮(静寛院宮)の婚礼道具を通じて、徳川將軍家における婚礼についてひも解く展覧会。

15

戦時下東京の子どもたち



2017年(平成29)3月7日～5月7日

担当者 松井かおる、川口友子

戦時下の暮らしを当時の子どもたちの体験談や、ゆかりの品々を通して振り返り、平和の尊さを考える機会とした。

2017年(平成29)度

2018年(平成30)度

16

発掘された日本列島2017

新発見考古速報



2017年(平成29)6月3日～7月23日

担当者 齋藤慎一、津田絢子

旧石器時代から現代までの17遺跡の出土品を展示。特集として、水中遺跡の発掘調査成果なども紹介。地域展は「速報」四谷一丁目遺跡一廻生産にみる江戸・東京一を実施。

17

徳川將軍家へようこそ



2017年(平成29)8月11日～9月24日

担当者 江里口友子、小林愛恵、川口友子

徳川記念財団が所蔵する徳川宗家伝来の資料の中から、歴代將軍ゆかりの品々を展示し、15代にわたる將軍たちと徳川將軍家について紹介。

18

NHKスペシャル関連企画 「大江戸」展



2018年(平成30)4月1日～5月13日

担当者 齋藤慎一、窪田直子

NHKスペシャル シリーズ 大江戸(全3回)の関連展覧会。小さな城下町「江戸」は、いかにして、政治・経済・文化の中心都市「大江戸」に発展していったのか、その繁栄の歴史を紹介。

19

発掘された日本列島 2018 新発見考古速報



2018年(平成30)6月2日~7月22日

担当者 松井かおる、津田絢子

6世紀初頭の榛名山噴火で被災した「甲を着た古墳人」が発見された金井東裏遺跡出土品などを展示。地域展は「東京郷土資料陳列館と考古学」を実施。

20

東京 150 年



2018年(平成30)8月7日~10月8日

担当者 沓沢博行、春木晶子

東京誕生から150年の節目の年に、東京という都市がどのような姿で始まり、150年の間にどのように変化をしていったのかを紹介。写真や映像、それぞれの時代に製作された地図などを展示。

21

玉 古代を彩る至宝



2018年(平成30)10月23日~12月9日

担当者 西村直子、川口友子

日本古代の歴史文化とゆかりの深い14県からなる古代歴史文化協議会と共同で開催した展覧会。いにしえの人々の美意識の結晶ともいえる玉を通して、古代日本の歴史・文化をわかりやすく展示。

2019年(平成31)度

22

春を寿ぐ 徳川将軍家のみやび



2019年(平成31)1月2日~3月3日

担当者 齋藤慎一、春木晶子

徳川記念財団が所蔵する品々を通して、徳川将軍家における「春を寿ぐ」行事を紹介。13代将軍継室篤姫(天璋院)、14代将軍正室和宮(静寛院宮)が所持した雑道具などを展示。

23

市民からのおくりもの2018 平成28・29年度 新収蔵品から



2019年(平成31)3月19日~5月6日

担当 資料係

2016年(平成28)度・2017年(平成29)度に収蔵した2,000点余りの資料の中から厳選し、亀戸梅屋敷の伝来資料や、歌川豊春の肉筆画の大作、蒔絵師・柴田是真の下絵類などの絵画、茶人・山岸会水の茶道具などを展示。

24

発掘された日本列島 2019 新発見考古速報



2019年(令和元)6月1日~7月21日

担当者 川口友子、齋藤慎一

旧石器時代から近代までの12遺跡 473点の出土品を展示。特集として「福島復興と埋蔵文化」と「記念物 100年」の展示も行った。地域展は「道灌がみた南武蔵」を実施。

25

いきものがたり 江戸東京のくらしと動物



2019年(令和元)8月6日～9月23日

担当者 西村直子、津田絃子

江戸東京の人々と、いきものとの多様な関係を、館蔵資料を中心に「愛されたいきもの」「働くいきもの」「人気のいきもの」「いきものデザイン」の4つの展示構成で紹介。

26

18世紀ソウルの日常 ユマンジュ日記の世界



2019年(令和元)10月22日～12月1日

担当者 朴美姫、市川寛明、熊谷紀子

18世紀の漢陽(現在のソウル)に生き、弱冠34歳で没した無名の青年ユマンジュが遺した貴重な日記のうち1784年の1年間を取り上げ、ソウルの風景やそこに暮らす人々の日常生活を紹介。

27

天下泰平 将軍と新しい文化の創造



2020年(令和2)1月2日～2月16日

担当者 齋藤慎一、川口友子

約260年間にわたり天下泰平の世をもたらした徳川家の歴代将軍が、文化創造の貢献者としての側面も持っていたことを紹介。徳川記念財団が所蔵する歴代将軍の書画、狩野派の絵画作品などを展示。

2020年(令和2)度

28

発掘された日本列島2020 新発見考古速報



2020年(令和2)6月6日～8月10日
会期変更:2020年(令和2)6月13日～8月3日

担当者 西村直子、春木晶子、熊谷紀子

51遺跡、約670点の出土品などを展示。地域展は「東京府史蹟」と題し、館蔵及び寄託資料で、「史蹟名勝天然記念物保存法」成立当時における東京府史蹟の一部を紹介。

※新型コロナウイルス感染症の影響により会期を変更して開催した。

29

大東京の華 都市を彩るモダン文化



2020年(令和2)8月25日～11月23日

担当者 津田絃子、西村直子

欧米文化が取り入れられるようになった明治時代から、モダンな都市生活を謳歌するようになる1930年代頃までを館蔵資料から紹介。版画や絵葉書、写真のほか、人々の生活を彩った品々を展示。

30

和宮 江戸へ ふれた品物 みた世界



2021年(令和3)1月2日～2月23日

担当者 齋藤慎一、川口友子

徳川記念財団が所蔵する14代将軍正室和宮(静寛院宮)が実際に見たり触れたりした作品を展示。和宮が使用した調度品をはじめ、孝明天皇から和宮が拝領した銀製品、和宮直筆の和歌などを紹介。

31

市民からのおくりもの2020 令和元年度 新収蔵品を中心に



2021年(令和3) 3月9日～5月9日

担当 資料係

2019年(令和元)・2020年(令和2)度に当館が新規に収集した資料の中から、「紅葉山八講法会図巻」「夢酔独言」など、厳選した資料約100点を展示。

32

発掘された日本列島2021



2021年(令和3) 6月5日～7月4日

担当者 熊谷紀子、西村直子

42遺跡、約630点の出土品などを展示。地域展「江戸の金箔瓦」では、東京オリンピック開催などによる都内開発事業で明らかになった発掘調査の成果を紹介。

33

相撲の錦絵と江戸文化



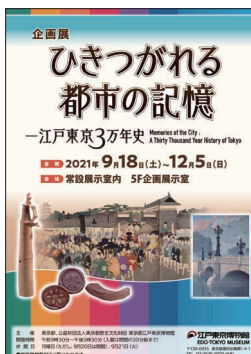
2021年(令和3) 7月17日～9月5日

担当者 春木晶子

18世紀末、時を同じくして黄金期を迎えた相撲と錦絵。興行の熱狂を伝えるとともにスター力士の人気を支えた相撲錦絵を中心に、江戸の相撲の魅力に迫る。

34

ひきつがれる都市の記憶 江戸東京3万年史



2021年(令和3) 9月18日～12月5日

担当者 津田絢子、橋本由起子

旧石器時代から現代まで、およそ3万年におよぶ東京の歩みを館蔵資料で振り返る展覧会。高輪築堤の出土や日本橋の首都高地下化など最新の情報も紹介。

35

徳川一門 將軍家をささえたひとびと



2022年(令和4) 1月2日～3月6日

※会期延長:2022年(令和4) 1月2日～3月31日

担当者 齋藤慎一、秋間敬代

徳川記念財団が所蔵する書画や工芸品などを通して、將軍家を支えた徳川のひとびとの活躍を紹介。尾張家初代徳川義直が編纂した「東照公御一代御年譜」、篤姫(天璋院)所用の雜道具などを展示。

特集展示

2000年（平成12）度以降、常設展示の各コーナーなどで実施している。
展示項目にない特定のテーマを設定し、館蔵品を中心に展示している。



①



②



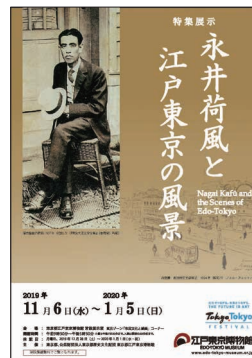
③



④



⑤



⑥

2016年（平成28）度

葛飾北斎 2016年（平成28）11月22日～12月25日

※本展はチラシを制作していない。

2017年（平成29）度

① 東海道五拾三次展 2017年（平成29）7月25日～8月27日

2018年（平成30）度

② 写楽の眼 恋する歌麿 浮世絵ベストコレクション 2018年（平成30）4月1日～5月6日

③ 玉川上水 2018年（平成30）8月28日～9月24日

2019年（平成31）度

④ FUROSHIKI TOKYO 2019年（令和元）7月23日～8月25日

⑤ 浮世絵と邦楽 隅田川をめぐって 2019年（令和元）8月27日～2020年（令和2）9月23日

⑥ 永井荷風と江戸東京の風景 2019年（令和元）11月6日～2020年（令和2）1月5日

62万点(図書資料27万点含む)に及ぶ「江戸博コレクション」から紹介。



武蔵野図屏風

江戸中期 18世紀

左端の富士山と右端の筑波山の間広がるスキの根元に、満月を配す。台地の上に位置する武蔵野は、水の便が悪かったことから、長い間開発の手が入らなかった。その姿を大きく変えたの

は、8代將軍徳川吉宗が享保の改革の一環として行った新田開発であった。着手からわずか15年で、武蔵野に80余りの村が生まれ、1000軒以上の家が建てられた。人々が防風や堆肥、薪炭利用のために育てた木々は、やがて豊かな雑木林を形成していった。この屏風は、そうした開発以前の武蔵野の原風景を彷彿とさせる。



柵

汐留遺跡(港区東新橋)仙台(伊達)藩邸跡出土
17世紀中頃

土塊に刺した松杭の間に細い竹がザックリと編み込まれ、隙間にハマグリやアサリなどの貝が顔をのぞかせている。この編み込まれた柵を「しがらみ」と言い、裏側には二枚貝がびっしりと詰まっている。汐留遺跡の発掘現場から一部を剥ぎ取り、科学的な保存処理を施している。1590年(天正18)に江戸に入った徳川家康は、日比谷入江の埋立や堀割の堀削など都市整備をしていく。17世紀中頃に仙台、龍野、会津の大名屋敷地となったこの地点は、海の浅瀬だったので、しがらみや板柵などで海岸を囲い、その区画中に土砂を入れて埋立を行った。しがらみは少し陸側に傾斜し、転倒防止のためか、数メートルごとに、裏側の控えの棒と繋がっている。裏側に大量に入れられた貝殻は、水はけが良いように詰められたと考えられる。江戸時代前期の海浜埋め立て技術を実物で示す貴重な資料である。

歌撰恋之部 物思恋

1793年(寛政5)頃 喜多川歌麿/画

喜多川歌麿が、紅雲母摺の背景に女性の顔を大きく描いた、5枚揃いの大判錦絵中の一。1793年(寛政5)頃の歌麿がもっとも充実した時期の作品で、版元は葛屋重三郎である。「歌仙」と「歌を撰ぶ」とをかけて「歌撰」ともじり、歌集の部立「恋」之部を下に付け、表題としている。女性の表情や姿態に微妙な心の裏を表すことで、それぞれの恋を描き分けた。この「物思恋」では、眉を剃り落とした既婚と思われる女性が、遠くに視線を投げかけている。過ぎ去った恋を思い出しているのだろうか。指の描写も、物思いにひたる様を表現しているかのようだ。本作はシリーズ随一の傑作とされ、国内での所蔵が極めて少ない。



市川鰍蔵の竹村定之進

1794年(寛政6) 東洲斎写楽/画

1794年(寛政6)5月の江戸三座夏狂言において上演された「恋女房染分手綱」に取材したもので、市川鰍蔵(前名・市川国十郎)が演じる竹村定之進を描く。背景を黒雲母摺にした大判大首絵28枚の中の一。鰍蔵の堂々とした貫禄と風格がにじみ出た傑作として、写楽作品の中でも特に評価が高い。鰍蔵の類いまれな風格と高い鼻の特徴をよく描き出すとともに、定之進切腹前の舞台の緊張感を少ない描線で見事に捉えている。見得を切った瞬間の力のこもった目は、当館のシンボルマークの元になり、デザイン化された。なお、本紙の裏側には、墨で役者絵の下書きが描かれている。





しろら しやあおいもん つきじん ぼ おり
白羅紗葵紋付陣羽織・
 くろぬり ぎん たて わくあおいもん ちらし まき え じん かき
黒塗銀立涌葵紋散蒔絵陣笠
(15代将軍徳川慶喜所用)

江戸末～明治初期

陣羽織は、表地に白羅紗を用い、背面上部中央に黒羅紗で葵紋を切り嵌め、裏地は金地錦に蝶や草花を豪華な刺繍で表している。また、銀製の釦すべてに葵紋が彫られている。陣笠は、縁に波形のうねりをつけて、背流れ風とした変形陣笠で、九本の銀立涌の間に三種類の蒔絵で葵紋を散らす。曲線的なデザインは、伝統的な陣笠と異なり、西洋文化の影響を受けており、時代の転換点を感じさせる。慶喜に仕えた渋沢栄一が編集した『徳川慶喜公伝 四』（1918年〔大正7〕刊）に、慶喜の七男・公爵徳川慶久氏蔵としてこの2点を含む品々が写真掲載されている。陣羽織、陣笠ともに美しい設えをしており、まさに徳川将軍が所持するに相応しい品といえる。



かつ かいしゅう にっ き
勝海舟日記

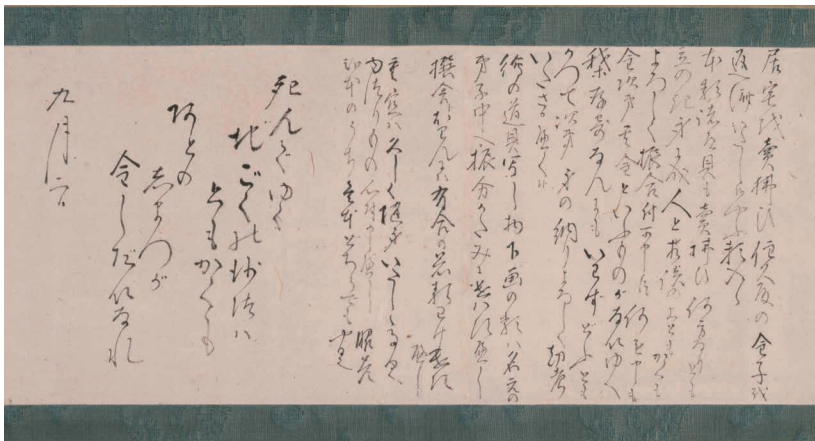
1862 (文久2) 閏8月~98年 (明治31) 12月

幕末明治期の政治家勝海舟 (1823 ~ 1899) の自筆日記。全25冊。海舟が軍艦奉行並に任じられた1862年 (文久2) 閏8

月17日に書き起こされ、死去する前月の1898年 (明治31) 12月31日まで書き継がれている。勝伯爵家旧蔵。

海舟の行動記録を軸に、彼の周辺で起きた事件や見聞した出来事及び接触した人々を記し、時には政治に関する自身の思いを書き綴る。公議派の幕臣として幅広

い人脈をもち、明治維新では江戸開城に奔走、明治政府との間を繋ぎながら徳川家の名誉回復に尽くした勝海舟の行動と思想、そして彼が生きた激動の時代を読み解くことができる。幕末明治史研究における基本史料の一つとして非常に重要である。



うた がわ ひろ しげ ゆい こんしやう
歌川広重遺言状

1858年 (安政5) 9月2日 江戸後期

ひろ しげ しょやう た げい い たと お
広重所用の煙草入れ、袂落とし
江戸後期

当館は、広重の遺言状と所持品、安藤家由緒書などを所蔵する。遺言状は、病死した1858年 (安政5) 9月6日の直前に自筆で書かれ、9月2日付、3日付、日付無し^の3通が現存する。2日付と日付無しの内容は、ほぼ同じで、絵の道具と絵手本、脇差しを弟子に、着物を親族に形見として遺すこと、その他は全て売払い、借金を返済することを言い残している。そして、最後を狂歌で「死んでゆく 地ごくの沙汰はともかくも あとのしまつが かねしだいなれ」と結ぶ。幕府定火消同心の子として江戸に生まれた広重。宵越しの金は持たない江戸っ子気質がうかがえる。3日付では古歌「我死なば 焼くな埋めるな 野に捨てて 飢えたる犬の 腹をこやせよ」に沿った簡素な埋葬を指示する一方、「葬式は武家の風にいたすべし」と自身の出自へのこだわりも見せる。所持品の煙草入れと袂落としは、一見素朴だが丁寧な作りで品が良く、広重の人柄を偲ばせる。





しじんぞう 四神像

1848年(弘化5)2月初午(はつうま)

なんて可愛い! そんな声が聞こえてきそう、見る人を虜にしてしまうこれらは、青龍、白虎、朱雀、玄武の四神像である。祭礼では、稲荷の神紋入りの旗が下がった竿上の台座に載せられ、剣鉾を中心に飾られた。四神は、古代中国を発祥とする天の四方を護る神で、東西南北に配された。江戸の商家には、稲荷が商売繁盛の神として祀られていた。江戸の代表的な酒問屋・鹿嶋屋の分家である鹿嶋屋東店でも、屋敷神として富永稲荷を祀り、大切にしていた。この四神像は、東店の富永稲荷で2月の初午祭礼に用いられたものである。四神像と共に当館が所蔵する鹿嶋屋資料は、稲荷の社殿や祭祀道具類をはじめ、生活民俗資料や帳簿・文書類なども含み、江戸の風俗と大店の暮らしを今に伝える。



スバル360

富士重工業(現・SUBARU)／製 1967年(昭和42)

「三種の神器」に象徴される家電製品とともに戦後の人々の暮らしに大きな変化を与えたのは自家用自動車である。その普及は家電に遅れ、「マイカー元年」と呼ばれた1966年(昭和41)頃からだ。その序章を飾ったのがスバル360である。製造した富士重工の前身は、軍用機の最大手であった中島飛行機。戦後は、スクーターやバス生産を行っていたが、需要を見込んで、自動車開発に乗り出した。独自の構想と技術を追求め、1958年(昭和33)5月にスバル360を発売した。軽自動車ながらおとな4人が乗車できる室内空間、優れた走行安定性と速力、それに低価格を実現し、大ヒット商品となった。幾度となく細かい変更や改善が行われており、当館資料のサイドにあるフラッシュランプは、1967年(昭和42)から装備された。



な し じ あおいろんちらしまつびしほいかからくまもんようまきえおんなのりもの 梨子地葵紋散松菱梅花唐草文様時絵女乗物、 きつこうはなびしもんしみつばあおいろんすたかかみ 亀甲花菱文地三葉葵紋姿見鏡、 つけたりなしじあおいろんちらしまつびしほいかるんようまきえきょうず 付梨子地葵紋散松菱梅花文様時絵鏡巢

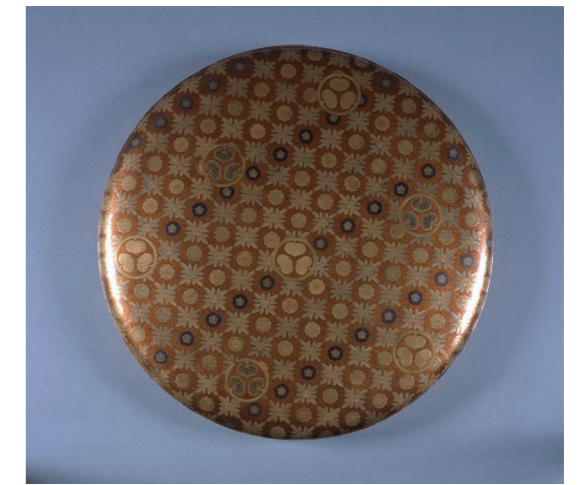
1698年(元禄11)

金粉を蒔いた様子が梨の肌のような梨子地に唐松・若松・梅花などを幾何学的に配置し、三葉葵紋と六葉葵紋を散らした最上級の女性用駕籠。家紋が葵紋で限定されることから、徳川家の婚礼であり、底裏に制作者の幸阿弥家と推測される銘が見られることや伝来などから、5代将軍徳川綱吉の養女八重姫の水戸家興入れの際の制作と考えられる。なお、1851年(嘉永4)に修理され、12代将軍徳川家慶養女線宮幟子

の婚礼時に再利用された。この女乗物と同じ意匠が施された鏡巢(鏡を納める容器)と、姿見に使用された大型(直径49.5cm)の鏡も八重姫の婚礼道具であることが、1921年(大正10)の入札目録や八重姫の婚礼道具目録から推察できる。分散した婚礼調度は当館で再び出会い、並んで収蔵されている。梨子地の女乗物は現在4艇しか確認されており、大型の姿見鏡も一般的な柄鏡と比べ現存数が少ない。



鏡



鏡巢



教育普及事業

当館では、こどもから大人まで幅広い層を対象とした
さまざまな教育普及事業を実施している。

えどはくカルチャー

学芸員や研究員の調査研究の成果や、展覧会の見どころなどを解説する講座を通年で実施している。1996年(平成8)の開講以来、参加人数は、延べ約19万人となっている。

新型コロナウイルス感染症が拡大した時期には、一部の講座の休止もあったが、再開後は会場における換気や一定の距離の確保、マスクの着用などの感染防止対策を講じ、参加者の協力を得ながら実施した。

2022年(令和4)4月からの大規模改修工事による休館期間も、会場を江戸東京たてもの園や東京都美術館などに移して継続して実施している。当館以外での開催に際しては、各会場の展覧会に関連した講座も企画することで、よりテーマの幅が広がっただけでなく、新規の参加者獲得の一助となっている。



講座会場の様子(2019年8月)



感染症拡大防止対策をした受付(2020年8月)

ふれあい体験教室

ふれあい体験スタッフボランティアが、土日祝日にファミリー層向けのワークショップを開催した。ガラス工芸、キモノ、歌舞伎、昔あそび、浮世絵、藍染、歴史散歩、歴史民俗の8班に分かれ、季節や年中行事に合わせて、来館者に伝統技術や文化に触れる機会を提供した。

ボランティアはワークショップ準備の過程で、伝統技術者からの指導や学習機会を得て、博物館はボランティアの助力を受け、体験型の教育普及メニューを充実させることができた。

2001年(平成13)9月から前身の「ふれあいサポートスタッフ」が試験導入され、途中「ふれあいスタッフ」への名称変更を経て、2002年(平成14)6月から本格的な活動を始めた。2022年(令和4)3月に、施設改修による休館をもって活動を終了するまで、21年間の活動期間中、ふれあいスタッフが実施した教室は876教室、参加者数は35,575人であった。

ミュージアムトーク

毎週金曜日の16時から行う学芸員による展示解説で、常設展示室内江戸ゾーン、東京ゾーンの各コーナーや企画展の担当者が交代で解説を行っている。集合場所は、5階常設展示室日本橋下・中村座前で、毎回30分程度。

展示への理解を深めてもらうことを目的に、展示のコンセプトや資料のみどころなどを来館者にわかりやすく解説している。

新型コロナウイルス感染症拡大のため2020年(令和2)3～9月、2021年(令和3)5月、8～9月の間、一時運営を休止、運営再開後は感染防止対策として所要時間を15分程度に短縮して実施した。それまで希望者は全員参加可能であったが、ソーシャルディスタンスを取るため整理券を配布し、参加者を最大20人に制限して実施した。



学校連携

常設展示室は、年間を通して多くの学校団体に利用いただいていた。より有意義な学習の機会となるよう、対象やテーマ別のワークシートを作成し、ホームページで公開するほか、ミュージアム・ラボで開催していた「さわってみよう!昔の道具」や、グループで来館した生徒を対象に、学芸員の仕事や展示について質問に答えながら展示室を回る「訪問学習」、中学生の「職場体験」など、博物館が少しでも身近になるようにさまざまなプログラムを実施した。

引率する先生に向けても、見学のポイントを紹介した活用ガイドの配布や、見学相談会の開催、各種研修の受け入れなど、学校の教育活動として博物館を有効に活用していただけるよう連携を図っている。



さわってみよう!昔の道具

ミュージアム・ラボでさまざまな道具に実際に触れることができるプログラムを2015年(平成27)度から開催してきた。木曜の13時30分から14時30分まで誰でも参加が可能で、黒電話や炭火アイロン、蓄音器など昔は身近だった生活道具から、日頃なかなか触れる機会のない甲冑の複製まで、週替わりで学芸員が紹介した。

生活道具は初めて触れることもただだけでなく、当時をよく知る世代の方たちからも懐かしいとの声をいただいている。また、職場体験では学生がスタッフとして解説を担当し、来館者とのコミュニケーションや博物館における資料の扱いを学ぶ機会としている。コロナの感染拡大により展示室での体験は休止となったが、公式YouTubeチャンネル「えどはくチャンネル」で4種類の道具を紹介している。



博物館実習

博物館実習は博物館法施行規則に基づく、大学で修得すべき博物館に関する授業科目の一つ。この科目のなかに学生が実際に博物館などで実務を経験することが含まれている。

当館では1999年(平成11)8月2日~13日に試行として開催され、翌年からは毎年実施している。学生の希望者は多いものの毎年20校20人に限って受け入れてきた。なお本館が休館となった2022年(令和4)度は、分館のみを会場とし、16校16名で実施した。

実習では作品の取り扱いのほか、収蔵資料を用いた資料整理・展示作業、さらには自ら展覧会を企画する作業までを経験する。参加した学生から喜びの声も多く、将来の学芸員のために重要な場を提供している。



ワークショップ

常設展示や企画展の内容に限らず、江戸東京の歴史や文化を幅広く体験できる参加型のプログラムを多数開催。学芸員やボランティアによるワークショップのほか、伝統工芸の職人や書道学科の大学生、戦争を実際に体験された方など、さまざまな方を講師に迎え、子どもから大人まで、また海外から来られた方にも多くご参加いただいた。



ボランティア養成

展示ガイドボランティアは、生涯学習の場としての博物館を念頭に、1997年(平成9)10月に試験導入された。当初は、外国語によるガイドと日本語による事前ガイドを行っていたが、日本語による展示ガイドも活動メニューに加えて、1999年(平成11)より本格的に始動した。

ボランティアは、江戸東京博物館の展示について学ぶ研修や、接遇研修などを受講して、江戸東京の歴史・文化や、社会包摂の理念を学ぶ機会を得るとともに、展示室でのツアーガイドをとおして社会参加や自己実現を果たした。

施設改修による休館のために2022年(令和4)3月をもって活動を終了したが、24年間の活動期間中、ボランティア登録者数は599人、ガイド件数は175,658件にのぼった。



都市歴史研究室では、江戸東京に関する研究センターとして、収蔵資料を中心とした江戸東京の歴史、文化、生活に関する調査研究を行っている。その成果を展示や刊行物で公開、発表するとともに、えどはくカルチャーやシンポジウムなどの事業に反映している。

おもな刊行物

◆東京都江戸東京博物館 調査報告書

当館で行った各種調査の成果をまとめた報告書。1994年(平成6)3月に第1集を発行して以来、継続して発行している。

第29集『江戸の園芸文化』(2015年[平成27]3月20日)

第30集『浅草地域のあゆみ—江戸の信仰とにぎわい—』(2016年[平成28]2月29日)

第31集『史料で読む江戸の園芸文化』(2016年[平成28]3月30日)

第32集『隅田川流域を考える—歴史と文化—』(2017年[平成29]3月30日)

第33集『浅草地域のあゆみII—近代化と盛り場の変容—』(2018年[平成30]3月31日)

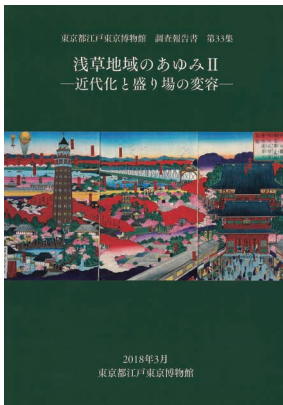
第34集『名所江戸百景と浪花百景』(2020年[令和2]3月30日)

第35集『モース研究』(2022年[令和4]3月4日)

第35集(英語版)『Edward Sylvester Morse』(2023年[令和5]2月24日)

◆東京都江戸東京博物館紀要

当館の職員が日頃の調査研究活動の成果を公表する論文集。1995年(平成7)10月に『研究報告』として刊行を開始し、2011年(平成23)から書名を改めて『紀要』第1号として刊行して以降、継続して発行している。第5号(2015年[平成27]3月20日)～第13号(2023年[令和5]3月10日)



調査報告書 第33集『浅草地域のあゆみII—近代化と盛り場の変容—』(2018年[平成30]3月31日発行)



紀要 第10号(2020年[令和2]3月30日発行)

◆江戸東京博物館 史料叢書

当館が所蔵する歴史資料の中から厳選した古文書を活字化した史料集。1998年(平成10)3月に1号を発行して以来、継続して発行している。

9号『江戸大伝馬町名主馬込家文書 旧記』(2018年[平成30]3月15日)

10号『菊花壇養種』(2019年[平成31]3月28日)

11号『新古改撰誌記1』(2020年[令和2]3月13日)

12号『米屋田中家 明治年間日記1』(2021年[令和3]3月26日)

13号『新古改撰誌記2』(2022年[令和4]3月4日)

14号『米屋田中家 明治年間日記2』(2023年[令和5]3月3日)

『勝海舟関係資料 海舟日記(六)』(2017年[平成29]3月31日)

シンポジウム

都市歴史研究室では、調査研究活動の一環としてシンポジウムなどの公開討論会を開催。一般の方々による参加も可能な形式で、1997年(平成9)1月から不定期で実施している。

「浅草地域のあゆみ—江戸の信仰とにぎわい—」(2014年[平成26]11月22日)

「隅田川流域を考える—歴史と文化—」(2016年[平成28]3月5日)

「浅草地域のあゆみII—近代化と盛り場の変容—」(2017年[平成29]8月5日)



シンポジウム「浅草地域のあゆみII」(パネルディスカッション)

◆東京都博物館協議会・日本博物館協会東京支部

2019年(平成31)度・2020年(令和2)度に、東京都博物館協議会理事長館及び日本博物館協会東京支部支部長として事務局業務を担当した。

◆全国歴史民俗系博物館協議会

2012年(平成24)6月の発足以来、当館は国立歴史民俗博物館とともに事務局を担当し、また、関東ブロック幹事館の一つとして継続して活動している。



国際交流事業

シンポジウムなどの開催を通じ、アジアや欧米の主要都市の博物館・美術館との国際交流を促進している。

日中韓博物館国際シンポジウム

2002年(平成14)から当館と中国・北京の首都博物館、韓国のソウル歴史博物館との間で毎年持ち回りによるシンポジウムを開催。日本・中国・韓国の都市における博物館の運営や活動について情報や意見の交換を行い、交流を深めている。なお、2007年(平成19)から中国・瀋陽故宮博物院が加わっている。



2022年日中韓博物館国際シンポジウム(リモート中継もされたパネルディスカッションの様子)

第13回 2014年(平成26)12月2・3日

テーマ:「博物館の収蔵品と来館者」「博物館の間の交流と協力」
開催場所・担当館:北京・首都博物館/発表者:竹内誠、各務豊、江里口友子

第14回 2015年(平成27)10月28・29日

テーマ:「文化発信拠点としての都市博物館」
開催場所・担当館:江戸東京博物館/発表者:新田太郎、市川寛明

第15回 2016年(平成28)10月11・12日

テーマ:「博物館発展途上中における文化創意的なオリジナルグッズの役目」
開催場所・担当館:瀋陽故宮博物院/発表者:市川寛明、坂井貴子

第16回 2017年(平成29)9月26・27日

テーマ:「都市歴史博物館と都市の記憶」
開催場所・担当館:ソウル歴史博物館/発表者:新田太郎、米山勇

第17回 2018年(平成30)8月15・16日

テーマ:「資源共有と学術協力ー『首都学』からみる博物館の密接なつながりについて」
開催場所・担当館:北京・首都博物館/発表者:岡塚章子、楯石もも子

第18回 2019年(令和元)10月22・23日

テーマ:「都市機能と博物館」
開催場所・担当館:江戸東京博物館/発表者:藤森照信、早川典子

2020年(令和2)

*新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止

2021年(令和3)

*新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止

2022年(令和4)9月5・6日

*今大会より回数表記無し

テーマ:「都市博物館と未来戦略」

開催場所・担当館:ソウル歴史博物館/発表者:田中延広、瀧良介

国際博物館会議

(International Council of Museums = ICOM)

ICOMは博物館の発展を目的に1946年に設立された、国際的な非政府組織(フランス・パリに本部を置く)で、世界各国・地域の博物館及び博物館専門家により、倫理的基準と革新的実践についての話し合いや交流が行われている。ICOMには国別に組織された国内委員会と地域連盟、そして専門分野に即して組織された32の国際委員会があり、すべての委員会が一同に会する「大会」が3年に一度、また各委員会による「年次会議」が毎年開催されている。当館は都市に関する博物館に勤務または関心を持っている会員のためのフォーラムである「都市博物館のコレクション・活動国際委員会(ICOM International Committee for the Collections and Activities of Museums of Cities = CAMOC)の組織会員である。2019年より当館を代表して都市歴史研究室が大会及び年次会議に参加し、世界中の博物館関係者と情報交換や知識の共有を図っている。

2019年(令和元)9月1～7日

第25回 ICOM 京都大会及び CAMOC2019年 年次会議

メイン会場:国立京都国際会館

CAMOC2019年 年次会議 共催および発表

発表者:小林淳一「グローバリゼーションと都市博物館の役割」

(『CAMOC ANNUAL CONFERENCE 2019 Book of Proceedings/ICOM 京都大会 CAMOC2019年 年次会議発表論考集』、2020年収録)

谷川真実子「The Edo-Tokyo Museum Renewal of Permanent Exhibition Galleries (江戸東京博物館常設展示室のリニューアルについて)」

(『Celebrating CAMOC 2019 in Kyoto : Japanese City museums special dossier (CAMOC 2019 京都開催記念ー日本の都市博物館特集冊子)』、2019年掲載)

*その他 9月8日 CAMOC ポストカンファレンスツアー 受入(当館常設展示室見学・職員との意見交換会の実施)

2021年(令和3)6月9～11日

CAMOC2020(2021)年 年次会議 *新型コロナウイルス感染症拡大の影響により2020年から本年に延期

メイン会場:ポーランド・クラクフ国立博物館(オンライン開催)

発表者:小林淳一「新型コロナウイルス感染症拡大と都市博物館の役割」(オンライン発表、『CAMOC ANNUAL CONFERENCE 2020(2021) Book of Proceedings (CAMOC2020(2021)年 年次会議発表論考集)』、2022年収録)

2021年(令和3)12月1～4日

CAMOC2021年 年次会議

メイン会場:スペイン・バルセロナ市歴史博物館(オンライン及び現地参加のハイブリット形式で開催)

発表者:岡塚章子「変化する東京」(オンライン発表、『CAMOC ANNUAL CONFERENCE 2021 Book of Proceedings (CAMOC2021年 年次会議 発表論考集)』、2022年収録)

2022年(令和4)8月22～25日

第26回ICOMプラハ大会およびCAMOC2022年 年次会議
メイン会場: チェコ・プラハ国際会議場、プラハ市博物館(オンライン及び現地参加のハイブリット形式で開催)

参加者: 岡本純子(オンライン参加)

国際交流展

◆都市・暮らし—18世紀の東京と北京

2002年(平成14)に始まった日中韓博物館国際交流事業の一環で共同の企画・調査研究を行った。その成果として、当館にて2017年(平成29)2月18日から4月9日まで特別展「江戸と北京—18世紀の都市と暮らし」を開催。さらに、江戸の資料を多く加えて北京・首都博物館でも同展を開催した。

会期:2018年(平成30)8月14日～10月7日

会場:北京・首都博物館

入場者数:278,790人

担当者:江里口友子、沓沢博行、窪田直子、胡艶紅



北京・首都博物館の展覧会場

◆パリ東京文化タンデム 2018

東京都・パリ市主催の「パリ東京文化タンデム 2018」事業の一環として、パリ日本文化会館にて、からくり人形の実演を実施。あわせて、からくり人形に係る紹介動画とパネル展示も同時期に実施した。

会期:2018年(平成30)

11月2、3日

「からくり人形の動態展示」

(1公演30分、1日5回、

計10回実施)

会場:パリ日本文化会館

小ホール

担当者:岡塚章子、長屋さくら、

小林淳一、小山周子、木村早霧



「からくり人形の動態展示」リーフレット

◆隅田川—江戸時代の都市風景

20年以上続けてきた日中韓博物館国際シンポジウムの成果の一環として、韓国・ソウル歴史博物館で当館収蔵コレクションによる「隅田川」展を開催。絵画や歴史資料をもとに隅田川流域の江戸の文化や生活をソウル市民に向けて紹介した。

会期:2022年(令和4)

9月7日(水)～10月23日(日)

会場:ソウル歴史博物館

入場者数:79,581人

担当者:朴美姫、岩崎茜



隅田川—江戸時代の都市風景 ポスター

◆いきもの:江戸東京 動物たちとの暮らし

フランス・パリ市にあるパリ日本文化会館との共催展。江戸東京の人々と動物の共存の様子について、版画・漆工・染織・玩具などの幅広い分野の館蔵資料から紹介した。

会期:2022年(令和4)

11月9日(水)～2023年

(令和5)1月21日(土)

会場:パリ日本文化会館

入場者数:15,546人

担当者:小山周子、川口友子、

西村直子



いきもの:江戸東京 動物たちとの暮らし
ポスター



江戸東京の歴史と文化に関する専門図書室。一般公開しており、展覧会図録をはじめとする当館刊行物の閲覧もできる。また、調査研究のためのレファレンスサービスを行う。

概要

1993年(平成5)の開館以来、江戸東京に関する専門図書室として、当館職員はもとより、来館者の調査研究に資する目的で運営を行っている。地域と時代の両面でもとらえた江戸東京に関する図書や雑誌を中心に、全国の博物館・美術館の図録・ニュース類、自治体発行物、都内タウン誌を積極的に収集し保存、公開を行っている。収蔵数は2023年(令和5)1月までで約27万点である。

大規模改修工事ともない2022年(令和4)4月から休室となったが、2023年(令和5)にはリニューアル準備室にて、「図書閲覧室」を開室した。※2023年(令和5)3月20日から試行、4月から実施、事前予約制。



リニューアル準備室の図書閲覧室

利用者サービス

閲覧室は一般公開しており、閲覧・複写・レファレンスサービスをはじめとし、館蔵の古文書などもマイクロフィルムによる閲覧を可能としている。2019年(平成31)4月から「国立国会図書館デジタル化資料送信サービス」に参加し、国立国会図書館が絶版等資料として判断したものについて当館内で閲覧ができるサービスを始めた。

日々のレファレンスでは常設展示に関連する内容が多く、その事例の一部は当館HPや国立国会図書館「レファレンス協同データベース」で公開している。例年夏には児童・生徒を中心とした「夏休み! こども歴史学習相談」を行っている。



こども歴史学習相談コーナーの様子

収蔵品システム改修・データ公開

2019年(平成31)度に当館の収蔵品システムを改修し、日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社のArtize MAに収蔵品のデータを移行した。図書の管理画面については、新規項目の追加や外部データの流用入力機能などの改修を行った。また、あわせてWeb OPACもリニューアルし、項目の追加・調整のほか、データの自動日次更新、画面の英語併記・書影の表示に対応した。

データの公開は当館OPACのほか、美術図書館連絡会(ALC)や東京資料サーチとの横断検索、NACSIS-CATとの連携を行っている。また、2021年(令和3)8月からは機関リポジトリを開設し、当館の紀要・史料叢書などを順次ウェブサイト上で公開している。



江戸東京博物館図書室 Web OPAC

展示との連携

博物館付設の専門図書室として、当館の展示やイベントとの連携も積極的に行ってきた。特別展・企画展にあわせ、関連図書を並べた特集コーナーの設置や、常設展示や公開講座と連携してテーマを定めて図書室・展示室双方の利用を促す「ワンテーマ・ツアー」、古文書の活用・調べ方案内、和装本ワークショップなどを開催した。

そのほか所蔵図書の調査・発表の場として、図書室内に設置した展示ケースで小展示を行っている。



図書室内の小展示



貸出施設ホールでは、ホールのPRと伝統文化や芸能の発展と継承のため「伝統芸能公演」を継続的に開催している。

2017年(平成29)10月から2018年(平成30)3月までホール改修工事を行い、伝統芸能公演が開催できる貸出施設として整備された。この新たな貸出施設ホールを活用して、伝統文化や芸能の発展と継承を目指し、こどもから大人まで誰でも気軽に楽しめる「伝統芸能公演」を継続的に企画し開催している。

2019年(令和元)9月には、ホールリニューアルオープン記念として公益財団法人日本芸能実演家団体協議会と連携し、主催公演「祝・江戸東京の芸能づくし」を開催した。

2020年以降は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため博物館が休館となり、公演の取消や延期など混乱した時期が続いたが、2021年(令和3)3月には公益財団法人日本舞踊協会と連携し「日本舞踊公演」を開催し大好評であった。また、同年の夏季に東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が開催され、オリンピック盛り上げ事業として「日本舞踊、落語、殺陣、弁士と無声映画」を開催した。

2022年(令和4)3月末、大規模改修工事のために休館となることから「休館前カウントダウン主催公演」を企画し伝統芸能の魅力を発信した。

休館中も都内各地のホールにおいて、「観る・学ぶ・楽しむ えどはくスペシャル公演」と題して、日本の歴史・文化の魅力を伝える公演を定期的に開催している。

2019年(令和元)9月

祝・江戸東京の芸能づくし「能楽、落語、和妻、清元、義太夫、琵琶、新内、小唄、常磐津、三曲(箏・三味線・尺八)、日本舞踊、長唄、殺陣公演と体験教室」

2021年(令和3)3月

日本舞踊公演

2021年(令和3)7月

常設展連携「村治佳織ミニコンサート」

2021年(令和3)6～9月

オリパラ盛り上げ事業「日本舞踊、殺陣公演、字幕落語と色物、弁士と無声映画」



日本舞踊「ボレロ」2021年6月

2022年(令和4)2～3月

休館前カウントダウン特別企画「村治佳織ミニコンサート、日本舞踊、落語と色物、殺陣公演と体験教室」



村治佳織ミニコンサート 2021年7月



字幕落語 2021年7月

2022年(令和4)12～2023年(令和5)2月

観る・学ぶ・楽しむ えどはくスペシャル公演「弁士とピアノ演奏付き無声映画、殺陣入門、はじめての三曲、おたのしみ寄席」



弁士と無声映画 2022年12月



殺陣公演 2023年1月



館の事業や展示を知ってもらうためには、デジタル技術を活用し
さまざまな形式でのコンテンツを発信している。

デジタルアーカイブス

江戸東京博物館デジタルアーカイブスは、当館が所蔵する資料を広く発信するため、2020年(令和2)3月に新規公開した資料情報検索用のデータベース。過去に使われてきたデータベースに以下の改善を加えたものになっている。

1. 収蔵資料の中から、コレクションあるいは資料群単位で閲覧できる機能を搭載した。
2. 資料の形態に応じ、さまざまな角度や場面からの画面表示が可能になった。

当館のデジタルアーカイブスは、収蔵資料全件公開をめざし、掲載数を漸次増加させ、進化中である。利用者の利便性や画像数の向上など、改良をはかり、さらに資料情報の整備や画像のデジタル化、英訳なども充実させていく。



江戸東京博物館デジタルアーカイブスのポータル。ここで通常の検索である詳細検索とは別にコレクション単位の検索ができるように工夫されている。

特別展 VR

2021年(令和3)度に開催した特別展「富嶽三十六景への挑戦 北斎と広重」及び「大江戸の華—武家の儀礼と商家の祭—」では、当館の特別展で初めて展示室内を360度カメラで撮影したオンラインバーチャルツアー(日本語版・英語版)を公開した。これらは文化庁「日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業」により「北斎と江戸の文化」の企画で助成を受け、委託制作した。



特別展「大江戸の華—武家の儀礼と商家の祭—」バーチャルツアーイメージ

「北斎と広重」展では新型コロナウイルス感染症拡大の影響で会期が短縮となったが、臨時休館中もオンラインで展示を公開することができた。また、「大江戸の華」展では解説動画を埋め込むなどコンテンツを充実させ、館蔵資料の魅力を国内外に向けて発信した。

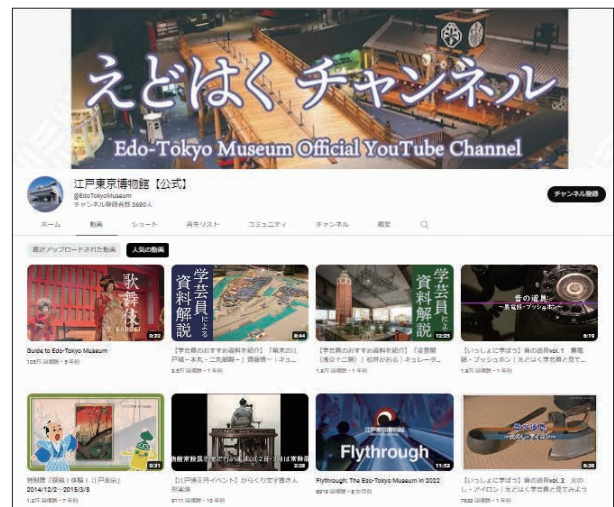
※両展バーチャルツアーとも2022年(令和4)3月31日に公開終了



特別展「富嶽三十六景への挑戦 北斎と広重」バーチャルツアー公開時のチラシ

えどはくチャンネル

幅広い層へ向けた広報を目的に当館公式のYouTubeチャンネル「えどはくチャンネル」を2012年(平成24)に開設。展覧会やイベント情報をはじめとした館の事業を紹介する動画を公開している。また、2020年(令和2)以降、新型コロナウイルス感染症拡大による臨時休館や教育普及事業などの一部が休止となったことを受け、当館の資料を自宅でも楽しむことができるオンラインコンテンツとしての側面も強化。休止となったワークショップの代わりとして撮影した「いっしょに学ぼう 昔の道具」シリーズや、学芸員による資料解説動画など、あらゆる場所から誰でも当館の展示や資料を楽しむ・学ぶことができる動画を製作。2023年(令和5)3月31日現在、計68本を公開している。



360度パノラマビュー

2017年(平成29)に江戸東京たてもの園で公開された「360度パノラマビュー」に続き、2018年(平成30)、江戸東京博物館常設展示室「360度パノラマビュー」をホームページにて公開した。原寸大の復元模型「芝居小屋・中村座」の内部や、「神田明神の山車」の上部、縮尺模型「寛永の町人地」など、展示室内の模型をさまざまな角度から撮影し、バーチャルミュージアムならではの空間を再現している。いつでもどこでも実際の常設展示室にいるかのような臨場感で展示室内を自由に楽しむことが可能となった。



「360度パノラマビュー」で見る寛永の町人地模型

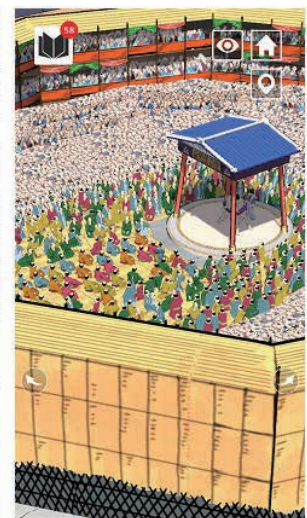
Flythrough: The Edo-Tokyo Museum in 2022

2022年(令和4)4月からの大規模改修工事による長期休館の前に、約9,000m²の広さをもつ常設展示室の全貌を、高精細ドローンにより浮遊鑑賞できる迫力ある映像を記録した。これは東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が進める「TOKYOスマート・カルチャー・プロジェクト」の一環として企画制作されたもので、当館の公式YouTubeチャンネル「えどはくチャンネル」にて公開、SNSなどで大きな反響を呼んだ。



ハイパー江戸博

「江戸を持ち歩く」感覚で、当館の展示や資料を楽しめるアプリ。株式会社ライノスタジオと共同制作し、2022年(令和4)4月22日にiOS版を、6月30日にAndroid版をリリースした。日本語版と英語版があり、スマートフォン端末などにダウンロードして世界中で無料で利用できる。常設展示室の展示模型「両国橋西詰模型」をもとに江戸時代後期の両国橋付近を3DCGで作成、ユーザーは其中を自由に歩き回り、当館の収蔵資料100点を集めながら、見世物小屋の見物や、火事、花火や相撲興行、隅田川での川開きを体験する。高飾北斎をはじめ資料をもとにデザインされた多彩なキャラクターも登場。ゲームエンジンを本格的に利用した博物館提供アプリは国内初であり、注目を浴びた。



その他の事業

来館者へ向けたさまざまなサービスを実施し、利便性の向上を図っている。
また、オリジナルグッズの作成や広報誌の発行など、館の魅力を伝えるための
さまざまな事業に取り組んでいる。

地域連携

両国地域の活性化と地域振興のため、近隣の企業・施設と結成した「両国協力会」の一員として多様な活動を展開している。

2019年(平成31)まで毎年春に開催されていた「両国にぎわい祭り」の実行委員会に参画。また両国の名所や飲食店を掲載した「両国にぎわいMAP」を継続的に制作している。

参加企業・団体との情報共有や広報の相互協力を深めるため、構成団体のバックヤードツアーや、墨田区と協力し防災に関する勉強会などを実施している。

江戸東京博物館 NEWS

当館が発行している広報誌。開館前の1992年(平成4)に「江戸東京博物館平成4年度開館準備ニュース」として始まり、1993年(平成5)3月28日に開館すると「江戸東京博物館NEWS」に名称を改めて発行を開始。毎号約6万部を発行し2022年(令和4)度までに日本語版が117号、英語版が26号まで発行している。展覧会をはじめとした館の事業を紹介するとともに、学芸員による資料紹介や研究発表に関する記事を掲載。事業紹介だけでなく読み物としても楽しめる広報誌として、館内外に広く配布している。



オリジナルグッズ

当館公式キャラクター「ギボちゃん」の関連商品をはじめ、子どもを厄災から守る色と信じられていた赤色で描かれた「赤絵」のみみずくをモチーフとした人形など、当館でしか手に入らないオリジナルグッズを作成し、館内ミュージアムショップで販売している。また、2018年(平成30)からはオンラインショップをスタート。当館が発行している書籍やオリジナルグッズを取り扱っている。



来館者サービス

さまざまなサービスを実施し、利便性の向上を図っている。

◆ガイドボランティア

展示ガイドボランティアによる無料の展示案内を、日本語・英語・中国語・ハングル・フランス語・ドイツ語・スペイン語で行っていた。団体向けには、館の見どころや見学のポイントなどの事前説明を実施した。(p.47参照)

◆音声ガイド

イヤホンレシーバーで常設展示の展示内容や模型の解説を聴くことができる。開館当初は日本語・英語・中国語・韓国語で実施。徐々に言語数を増やし、2018年(平成30)度には中国語(簡体字)・中国語(繁体字)・フランス語・スペイン語・ドイツ語・ロシア語・イタリア語・タイ語・ポルトガル語・マレー語の13か国語に対応した。

◆身障者向けサービス

点字ガイドブックの無料貸し出しや筆談器の設置、館内のバリアフリー化など、誰でも安心かつ快適に過ごしていただくためのサービスを実施。また、常設展示室では、小さなサイズで忠実に再現した日本橋や人力車の模型に触れることができる「手でみる展示」や、受話器を取って江戸と東京のさまざまな音を聞くことができるコーナー、触知案内図の設置など、視聴覚障害をお持ちのお客さまにもお楽しみいただける展示を用意している。

◆団体の予約

団体で来館の場合は、観覧予定日の2週間前までに事前申請する。来館者用団体バス駐車場もある。(要事前予約・駐車有料)

◆学校団体での来館

教育目的で来館する都内の小・中・高等学校などの学校団体は、生徒、教職員ともに常設展観覧料が無料となる(要事前申請)。都外の学校団体は、小学生は無料、中・高校生は有料。小・中・高等学校で、教育課程に基づく観覧に先立ち、教職員が事前に下見する場合の常設展観覧料は無料となる。

また、防災教育・平和学習・環境教育・伝統文化の学習に役立つ、見学のポイントを紹介したパンフレットや、クイズ形式のワークシートを用意している。ホームページからのダウンロードが可能となっている。

◆その他

館内利用専用の、車椅子とベビーカーを無料で貸し出している。また1階と5階には授乳室があり、1階と7階に料金返却式のコインロッカーを設置している。

江戸東京博物館友の会への支援

友の会は、江戸東京の歴史と文化を振り返り、先人の営みを知り、未来の東京を考える人々の自主的な組織として、2001年(平成13)に結成された。

年会費は4,000円で、「友の会セミナー」「古文書講座」「見学会」などを会員が自主的に企画している。江戸東京博物館は、友の会会員が江戸東京の歴史を学べるよう支援しており、常設展観覧料の無料や、特別展観覧料を会員半額、同伴者(1名のみ)の20%割引、えどはくカルチャーの割引など、さまざまな会員特典を提供し、協力している。

ロケ撮影

2021年(令和3)3月18日から所定の撮影場所にて「ロケ撮影」の有料受け入れを開始した。雑誌、商品カタログ、商品広告、ファッション撮影などを対象としたスチール撮影やテレビCM、映画、テレビドラマ、音楽プロモーションビデオなどの映像(ムービー)制作で利用ができる。企画書を提出し、内容審査後に申し込みを受け付けている。

施設紹介

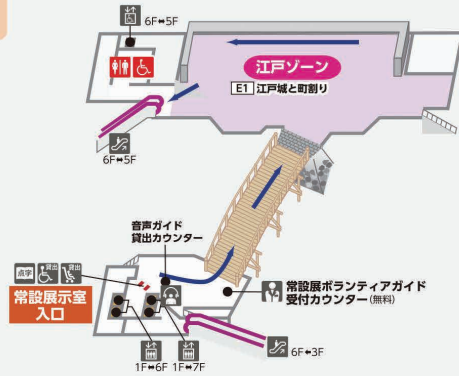
地上7階、地下1階。隣接する国技館との調和を考えた、高床の建物となっている。

高さは62.2m。敷地面積は29,293㎡。延床面積は48,512㎡。

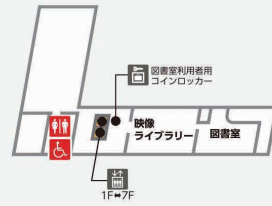
5・6階の常設展示室面積は8,934㎡。1階の展示室面積は1,006㎡。設計者は菊竹清訓。

6F 常設展示室(入口)

※当日に限り再入場できます。

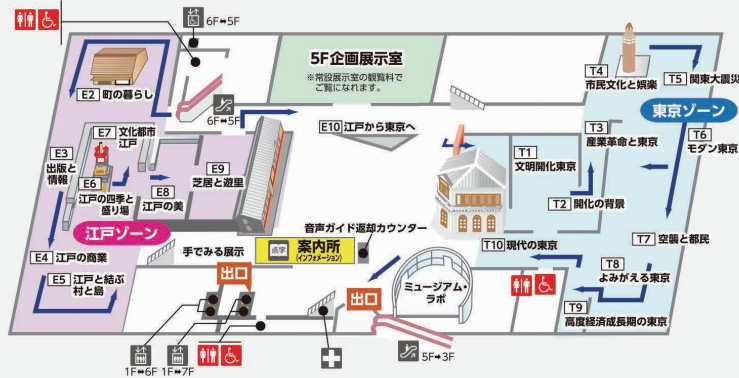


7F 図書室・映像ライブラリー



5F 常設展示室(出口)

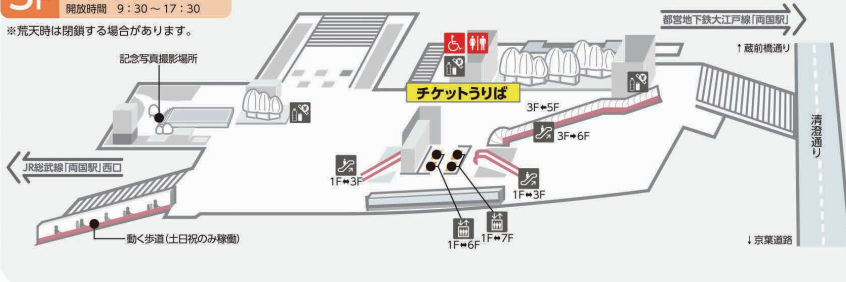
※5Fからの入場はできません。



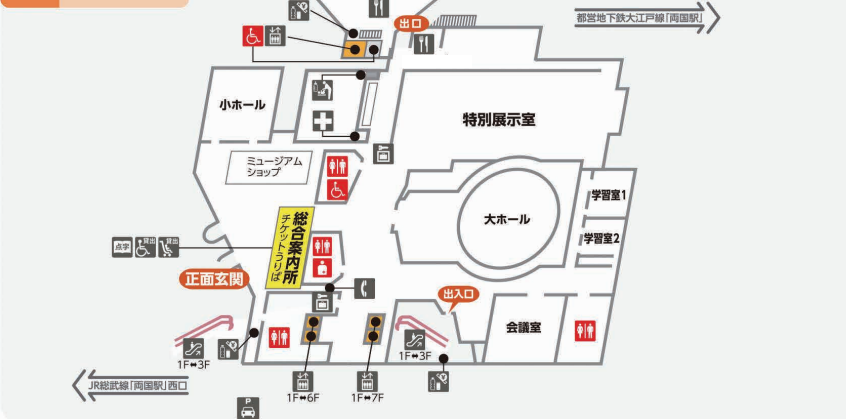
3F 江戸東京ひろば

開放時間 9:30 ~ 17:30

※荒天時は閉鎖する場合があります。



1F 総合案内所 特別展示室



- トイレ
- だれでもトイレ
- オストメイト対応トイレ
- 救護室
- 授乳室
- エレベーター
- 車いす・ベビーカー専用エレベーター
- エスカレーター
- 公衆電話
- 自動販売機
- 団体バス及び身障者用優先駐車場
- タクシーのりば
- コインロッカー
- 車いす貸出
- ベビーカー貸出
- 点字ガイドブック貸出
- レストラン・カフェ

2022年3月現在

映像ライブラリー

当館が所蔵する、江戸東京の歴史、自然、伝統芸能などに関する映像作品を専用端末で視聴できる。2009年(平成21)年度に地下1階から7階図書室内の一角に移設された。無料で利用が可能で、利用者は受付で専用ヘッドホンを受け取り、見たい作品をタッチパネル方式で分野別を選ぶことができる。東京の民俗芸能に取材した当館制作の作品や、「1,000万人の話題(東京ニュース)」をはじめ、戦後東京の発展をレポートした東京都映画協会による行政映画など、貴重な映像資料をおよそ550タイトルを公開している。

江戸東京ひろば

本館3階にある屋外の開放的なスペースで、チケット売り場、休憩所、6階常設展示室まで繋がるメインエスカレーターの乗降口、集合写真撮影場所などがある。ヘブンアーティストの活動など各種イベント会場にも使用している。

休憩所

本館3階の江戸東京ひろばには、北側休憩所(約250席)と、JR総武線の線路側の南側休憩所(約100席)の2つの無料休憩所がある。いずれも冷暖房完備で、学校団体がお弁当を食べるのに最適なスペースとなっている。

駐車場

来館者向けの団体バス有料駐車場及び身障者優先駐車場がある。空いている時は一般車も利用することができる(有料)。

また、清澄通り沿いJR総武線脇の空地を活用し、コインパーキングを設置している。

貸出施設

2017年(平成29)10月1日からホール改修工事のため休館し、2019年(令和元)7月から会議室と学習室をリニューアルオープン。同年8月から大・小ホールを伝統芸能公演が開催できる施設としてリニューアルオープンし、一般貸出を開始した。

伝統文化発信の機能を強化させ、より多くの伝統芸能公演が実施できるようにするため、貸出方法も変更した。

- ① 予約対象として、一般とは別に、伝統芸能、民俗芸能その他伝統的な文化に係る公演など、江戸及び東京の歴史と文化の振興に資する公演など、公益性、公開性のあるもの(以下「伝統芸能公演など」)の区分を設け、予約受付と受付期間を新たに設定した。
- ② 伝統芸能公演などの予約は選考委員会を開催し実施内容を審査の上、優先的に予約を受け付ける。(「伝統芸能」優先予約の受付は、利用月の15～13か月前から、「一般利用」の受付は、6か月前から)
- ③ 使用時間は9時から22時までとする(終了時間を1時間延長)。

施設の特徴を生かして伝統文化の魅力を発信するため、貸出施設担当が企画し、江戸東京博物館主催のもと、リニューアルオープン記念公演として各種の伝統芸能公演を開催した。以後も、当館主催の「伝統芸能公演」を継続的に開催し、貸出施設の認知度アップを図ってきた。2022年(令和4)年度以降の休館中も館外ホールで伝統文化の魅力発信と館や貸出施設のPRを行っている。

◆大ホール

客席 369席 車椅子スペース 6台分
床面積 601㎡
舞台間口 12.7m(7間) 奥行 6.17m(約3.4間)
高さ 5m(約16尺) 舞台高さ 0.5m(1.6尺)
プロセニウム形式 引割緞帳あり 花道なし
設備 屏風、所作台、平台など
楽屋1(面積31.35㎡) 楽屋2(面積31.35㎡)
※楽屋1と楽屋2の間仕切り開放可能
楽屋3(和室15畳)(面積30.88㎡)
※難聴者用補聴システムの対応が可能



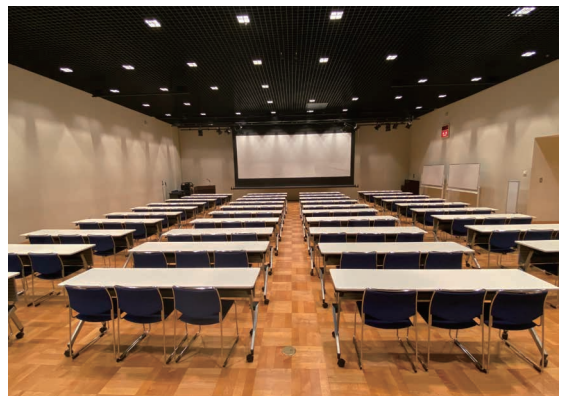
◆小ホール

客席 135席 車椅子スペース 4台分
床面積 217㎡
舞台間口 6m(約3間3尺) 奥行 3.61m(約2間)
高さ 3.7m(約2間) 舞台高さ 0.45m(約1尺5寸)
設備 屏風・所作台・平台など
楽屋1(面積13.60㎡) 楽屋2(面積13.60㎡)
※難聴者用補聴システムの対応が可能



◆会議室

面積 315㎡
収容人数 120人
設備 スクリーン、プロジェクター、マイク



◆学習室1

面積 100㎡

収容人数 54人

設備 スクリーン、プロジェクター、マイク

学習室2と連結利用が可能

◆学習室2

面積 79㎡

収容人数 45人

設備 スクリーン、プロジェクター、マイク

学習室1と連結利用が可能



ミュージアムショップ

開館当初、ミュージアムショップは特別展示室出口にあたる場所にオープンしたが、その後來館者の導線を考慮し、2002年(平成14)度に正面玄関を入ってすぐの総合受付横へ移動した。

1997年(平成9)度には5階常設展示室内のショップがオープン、絵はがき、手ぬぐいなど歴史や伝統を感じさせる商品をはじめ、当館のオリジナル商品・書籍を中心に販売。



館内飲食施設の変遷

開館にあわせて、7階に和食レストラン、2階に洋食レストラン、1階に軽食喫茶がオープンして以来、来館者のニーズに合わせてたびたび運営形態や広報の見直しが行われてきた。

各店舗では、展覧会とのコラボメニューを開発するだけでなく、館の特色を生かした試みも行った。2020年(令和2)度まで営業していた7階のレストランでは、かつての江戸城天守とほぼ同じ高さからの景色を眺めながら、寿司や蕎麦などの和食を楽しむことができた。このほか、2004年(平成16)度には、もともとピロティとなっていた空間を室内化した洋食レストランを増設し、オムライスなどの昔ながらの洋食がメニューに並んだ。このように、展示室以外でも来館者に江戸東京の文化に触れる機会を提供してきた。